

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1014J
授業名	経済と安全保障
担当者	TOMIKAWA Hideo／富川 英生
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall, Winter 秋、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

わが国の安全保障に関する総合的かつ戦略的な考察の資とするため、経済の観点から国際関係を分析・把握するとともに、その基礎的方法を習得する。

[到達目標]

本講義の到達目標は以下のとおりである。

- ・国際関係論（国際政治経済）と経済学のディシプリンをつなぐ基本的な概念について理解し、経済情勢に係る報道、レポート等から、国際安全保障に与える影響を読み解くことができる。
- ・マクロ経済学における生産関数の基本的枠組みを理解し、各要素に関する理解を深めることで、経済情勢や国際環境の変動が日本の経済力に与える影響を論理的に考察することができる。
- ・経済統計を適切に収集、加工することで、国際関係の分析に資するエビデンスを例示することができる。
- ・経済と安全保障の相互関係についてリサーチデザインを立て、関連する学術論文や政策レポートを読解し、その共通理解の下で討議し、調査研究を進めることができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

- ①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力
- ③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 導入講義「経済と安全保障（経済基礎・国際政経論）」
- 第2回 経済基礎（1）「人（人口動態）」
- 第3回 経済基礎（2）「モノ（資源・エネルギー）」
- 第4回 経済基礎（3）「お金（国際金融・通貨市場）」
- 第5回 経済基礎（4）「流通（国際物流）」
- 第6回 共同研究導入講義「中国の経済外交政策」
- 第7回 共同研究（1）「第1回討議」
- 第8回 共同研究（2）「第2回討議」
- 第9回 共同研究（3）「第3回討議」
- 第10回 共同研究（4）「第4回討議」
- 第11回 まとめ「共同研究成果発表会」

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

- まとめ「共同研究発表会」での発表内容（50%）
- 第10回終了後に課す課題レポート（持ち帰り式）（50%）

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読／参考 T B A

第2回

必読／参考 T B A

第3回

必読 柴田明夫『今、資源に迫っている危機』（T A C出版、2013年）

参考

1 柴田明夫『図解 世界の資源地図』（中経出版、2012年）

2 柴田明夫『食糧危機が日本を襲う！』（角川SSC新書、2011年）

3 柴田明夫『日本は世界一の「水資源・水技術」大国』（講談社プラスアルファ新書、2011年）

4 柴田明夫『「シェール革命」の夢と現実』（PHP研究所、2013年）

5 柴田明夫、中田雅彦、大場紀章、星野克美共著『コロナ後を襲う世界7大危機 石油・メタル・食糧・気候の危機が世界経済と人類を脅かす』（NextPublishing Authors Press、2021年）

第4回

必読 棚瀬順哉「国際収支の基礎・理論・諸問題」（財経詳報社 2019年12月）

参考 吉川雅幸「ドルリスクー米国発世界金融危機のゆくえー」（日経ビジネス人文庫、2009年）

第5回

必読／参考 T B A

第6回

必読 T B A

参考

1 「転換期にある「一帯一路」構想と経済外交」（松本はる香編著『＜米中新冷戦＞と中国外交』所収、白水社、2020年）

2 大西康雄「転機の一帯一路構想」（『「一帯一路」建設と日中第三国市場協力』、中国社会科学出版社、2020年）

第7回、第8回、第9回、第10回、第11回

必読

1 丸川和雄・梶谷懐〔著〕『超大国・中国のゆくえ 4—経済大国化の軋みとインパクト』（2015年、東京大学出版会）序章、終章（1-18、211-225頁）。

2 内閣府「（1）景気の拡大テンポが緩やかになる中国経済」『世界経済の潮流2014年I』第1章第2節3 アジア経済（平成26年6月）83-95頁。

http://www5.cao.go.jp/j-j/sekai_chouryuu/sh14-01/pdf/s1-14-1-2-3-1.pdf

http://www5.cao.go.jp/j-j/sekai_chouryuu/sh14-01/pdf/s1-14-1-2-3-2.pdf

参考

1 IMF (2015), People's Republic of China: 2015 Article IV Consultation, Washington, D.C.: IMF.

<http://www.imf.org/external/pubs/ft/scr/2015/cr15234.pdf>

2 各班のテーマ決めなどの参考として、Keizaireport.com等で中国経済・世界経済に関するレポートを検索

<http://www3.keizaireport.com/report.php/-/node=65/>

https://www.mof.go.jp/pri/research/conference/china_research_conference/index.htm

<http://www5.cao.go.jp/keizai3/whitepaper.html>

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2127J
授業名	戦略策定法
担当者	ARIE Kouichi／有江 浩一
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall, Winter 秋、冬
単位数	2

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

戦略の古典『孫子』を参考に、戦略の策定に必要とされる、目的と手段の相互関係、戦略環境分析、方策の案出法について理解を深める。

[到達目標]

- ・『孫子』の戦略について体系的に理解し、その本質と特徴を説明できる。
- ・『孫子』の戦略を手掛かりとし、現実の課題に対する独創的な戦略を提示できる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

（1）前段

第1回 導入講義：『孫子』と現代の戦略的課題

第2回 テキスト論点討議：戦略の目的と手段

第3回 同上：戦略環境分析①

第4回 同上：戦略環境分析②

第5回 同上：方策の案出法①

第6回 同上：方策の案出法②

第7回 事例研究

第8回 論点整理、後段研究指示

※『孫子』の戦略の理解

テキスト論点討議：事前にテキストを読み込み、論点をメールにて講座担当者に提出

事例研究（第7回）：導入講義時に指示

（2）後段

第1回 研究テーマ指導

第2回 研究指導

第3回 同上

第4回 中間発表

第5回 研究指導

第6回 同上

第7回 発表

第8回 総括討議

※戦略レポートの作成

研究テーマは、戦略問題に係る研修員個人の興味関心に基づいて選定

『孫子』を手掛かりとしつつ、独創的な戦略を策定し、レポートに纏めて発表

レポートは、第8回目終了後速やかにメールにて提出

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

発表・討議（40％）、レポート1回（60％）

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

必読：浅野裕一『孫子』（講談社学術文庫、1997年）

4-2:その他

参考：

Sun Tzu, *The Art of War: A New Translation* (London: Amber Books, 2022)

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP3301J
授業名	政策シミュレーション
担当者	MATSUURA Yoshihide／松浦 吉秀
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall through Spring 秋－春
単位数	4

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

国家安全保障政策決定過程についての講義を受講するとともに、班討議、政策シミュレーション演習及び全体討議への参加を通じて、学生が将来の安全保障・防衛政策の在り方について検討するための知識や能力を涵養することに資する。

[到達目標]

- ・政策シミュレーションとその方法論について適切に理解し利用することができる。
- ・マトリクスゲームやセミナーゲーム等の形式による政策シミュレーション演習にプレイヤーとして参加し、他の各講義・セミナーで得た知識を総合的・一体的に活用して擬似的に国家安全保障に係る戦略レベルの意思決定を行う経験から、安全保障・防衛政策実務において必要な広い視野、柔軟な思考力・判断力を習得し、利用することができる。
- ・プレイヤーとしてセル内及び他セルのプレイヤーと迅速・的確な合意形成による課題解決を図る経験から、実務において必要とされるレベルのコミュニケーション能力を持つことができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制的適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

DP④組織のリーダーとして、必要な情報を提供し、また問題解決方法を提示する能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回（2時間） 導入講義：政策シミュレーションの目的、進め方、他の講座・セミナーとの関連等につきガイダンス
- 第2回（2時間） 概論：政策シミュレーションの歴史的発展、特徴、活用事例等を概説
- 第3回（6時間） グループ討議：複数班に分かれ、付与される課題について班内で議論の後発表
- 第4回（2時間） 演習I（基礎）事前講義：シミュレーション演習のテーマに関する講義及び演習概要説明
- 第5回（4時間） 演習I（基礎）グループ作業：複数セルに分かれ、演習のテーマに応じ事前準備、資料読解
- 第6回（6時間） 演習I（基礎）政策シミュレーション演習：テーマに応じたシナリオに基づきゲームを実施
- 第7回（2時間） 演習I（基礎）レビュー：複数セルに分かれ、ゲーム結果につきセル内で議論の後発表
- 第8回（2時間） 政策講義(1)：国家安全保障政策に関わる実務者による講義（予定：NSS次長（外務））
- 第9回（2時間） 演習II（応用）事前講義：第4回と同様
- 第10回（4時間） 演習II（応用）グループ作業：第5回と同様
- 第11回（8時間） 演習II（応用）政策シミュレーション演習：第6回と同様
- 第12回（2時間） 演習II（応用）レビュー：第7回と同様
- 第13回（2時間） 政策講義(2)：国家安全保障政策に関わる実務者による講義（予定：NSS次長（防衛））
- 第14回（2時間） 演習III（総合）事前講義：第4回と同様
- 第15回（2時間） 政策講義(3)：国家安全保障政策に関わる実務者または専門研究者による講義
- 第16回（6時間） 演習III（総合）グループ作業：第5回と同様
- 第17回（8時間） 演習III（総合）政策シミュレーション演習：第6回と同様
- 第18回（2時間） 演習III（総合）レビュー：第7回と同様

(計64時間)

演習内容は、多様な政策シミュレーションの体験を旨としつつ、全体としては学期の進展に合わせ基礎的なものから複雑なものへと発展させる。演習のテーマ、シナリオについては現今の安全保障情勢を踏まえ都度別示する。

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

演習でのプレイヤーとしての参画度、討議・発表への貢献度（100%）

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

演習のテーマに基づき都度別示

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP5301J
授業名	政策論文演習
担当者	Various／関係教員
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall through Summer 秋－夏
単位数	2

1. 本授業の概要及び到達目標：

【概要】

政策論文演習は、戦略研究プログラムの学生がリサーチペーパーの執筆に取り組むにあたり助言、指導を行う目的で開設されたものである。秋から冬学期に関しては、定期的に合同セッションを持ち、テーマ選定とリサーチ方法に関する指導を行う。また、国内政治分析、国際政治分析の基本的な知識の確認を行う。春・夏学期には、アドバイザーと個別に指導を行い、リサーチペーパーの完成を目指す。GRIPSと防衛研究所より、テーマに応じて合計2名のアドバイザーが決められる。この講義は、SDGsの目標17（平和と公正）に関連する。

【到達目標】

- ・論文を書くにあたり、リサーチ・クエスションの設定、仮設の設定、研究手法、論文の執筆方法などの一連の流れを理解する。
- ・安全保障・防衛問題につき、有意なリサーチ・クエスションを設定し、それに対するリサーチ方法を身につけ、組織のリーダーとして必要な情報を収集し、問題解決方法を提示する能力を身につける。
- ・調査の過程で各種政府機関や外国政府関係者との接触をすることにより、実際の政策履行時における調整・実現能力をつける。
- ・課題を設定し、それに対する解答を見つけるためのプロセスを習得し、解答を他人にうまくコミュニケーションするための口頭発表と文章作成の双方の能力を身につける。

*関連するディプロマポリシー：SSP①②④⑤

①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

④組織のリーダーとして、必要な情報を提供し、また問題解決方法を提示する能力

⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

Session 1～3 (10月):

オリエンテーション。リサーチペーパー作成の基本。

・セッション内においては、設問、仮設、研究手法などが適切か、全員でディスカッションをする。講師からは各ステップで重視すべきことを指導する。

【事前準備】

・学生は、毎回定められた期限までに、所定のフォーマットを使い、プロポーザルを提出する。

【講義後の作業】

・授業内での指導に従い、プロポーザルを必要に応じて修正する。先行研究などを調べ、防衛研究所の教官とも協議する。

・テーマが決まった段階で、GRIPS・防衛研究所双方に相談の上、指導教官を決定する。

Session 4～10: 基本的に隔週で、国内政治・国際政治に対するアプローチ、リサーチの方法について、岩間と竹中より問題提起があり、ディスカッションを行う。実際の論文作成の技術的な問題を、必要に応じてCPCの教員などを招きながら指導し、各人の研究の進展具合を確認しつつ、指導を行う。中間発表後には、その結果を踏まえて内

容の修正方向を確認する。

春～夏学期は、指導教官の指導の下にリサーチペーパーを完成させる。

Session 4 （竹中）日本政治分析の基礎I

【事前準備】テキスト『日本政治の第一歩』の4章、5章を (pp.73～116)を読む。

【講義内容】議院内閣制、三権分立という日本の統治構造を理解するために必要な基礎概念について説明するとともに選挙制度が統治構造に及ぼす影響について議論する。

【講義後】授業内容を振り返り、さらに疑問が生じた際は質問を送る。

Session 5 （岩間）国際政治分析の基礎I

【事前準備】テキスト『国際政治学をつかむ』のunit0、unit1～10 (pp.1～123)を読み、質問を二問考え、事前に講師まで送る。

【講義内容】主権国家の誕生からポスト冷戦期までの国際政治の大きな歩みを理解する。史実を覚えるのではなく、国際政治システムの変遷という観点から歴史を考える能力を獲得する。国際関係の基本的概念、および理論についての理解を獲得し、それをを用いて現実の分析が行えるようになる。

【講義後】授業内容を振り返り、さらに疑問が生じた際は質問を送る。

Session 6・7・8 第1回中間発表会（12月）

【事前準備】学生は、所定の期日までに最初のドラフトを提出する。また、ペーパーの内容を、10枚以内のパワーポイントスライドにまとめて、所定に日時までに提出する。

【発表会】学生は15分以内にプレゼンテーションを行う。その後、学生・指導教官を交えてディスカッションを行う。

【講義後の作業】学生は、防衛研究所、GRIPSの指導教官と協議し、プレゼンテーションで指摘された問題点に関する対応策を考え、ペーパーに適宜修正を加える。

Session 9（竹中）日本政治分析の基礎II

【事前準備】テキスト『日本政治の第一歩』の6章、7章を (pp.117～160)を読む。

【講義内容】首相をはじめとする重要な政治アクターについて紹介する。また、国会が政策決定過程において果たす役割、与党議員に及ぼす影響について説明する。

【講義後】授業内容を振り返り、さらに疑問が生じた際は質問を送る。

Session 10 （岩間）国際政治分析の基礎II

【事前準備】テキスト『国際政治学をつかむ』のunit11～19 (pp.124～220) 、を読み、質問を二問考え、事前に講師まで送る。

【講義内容】国際政治における安全保障、経済、文化、国際機関、地域機関、脱国家的主体などの役割を理解する。また、政治体制が国際関係に及ぼす影響、対外政策や外交交渉の決定過程を理解するための基礎的知識を獲得する。

【講義後】授業内容を振り返り、さらに疑問が生じた際は質問を送る。

Session 11 （竹中）日本政治分析の基礎III

【事前準備】テキスト『日本政治の第一歩』の1章、9章を (pp.1～160)を読む。

【講義内容】首相をはじめとする重要な政治アクターについて紹介する。また、国会が政策決定過程において果たす役割、与党議員に及ぼす影響について説明する。

【講義後】授業内容を振り返り、さらに疑問が生じた際は質問を送る。

Session 12 （岩間）国際政治分析の基礎III

【事前準備】テキスト『国際政治学をつかむ』のunit 20～29(pp.221～335)を読み、質問を二問考え、事前に講師まで送る。

【講義内容】特に最近の国際関係に起きている新しい現象を考え、それが国際政治をどのように変化させているのかを分析する。核兵器、新しい戦争、国連の軍事活動、人権、グローバリゼーション、ODA、環境問題、科学技術とエネルギー、米中関係など、どれも現実学生が直面する課題を扱い、実際の政策作成のための分析視角を獲得する。

【講義後】授業内容を振り返り、さらに疑問が生じた際は質問を送る。

Session 13~15 (3月) 第2回中間発表会

【事前準備】学生は、所定の期日までに最初のドラフトを提出する。また、ペーパーの内容を、8枚以内のパワーポイントスライドにまとめて、所定に日時までに提出する。

【発表会】学生は10分以内にプレゼンテーションを行う。その後15~20分、学生・指導教官を交えてディスカッションを行う。

【講義後】学生は、防衛研究所、GRIPSの指導教官と協議し、プレゼンテーションで指摘された問題点に関する対応策を考え、ペーパーに適宜修正を加える。

春～夏学期は、指導教官の指導の下、論文作成を進める。最終発表会を経て、期日までに論文を提出する

3. 成績の評価方法：

授業におけるプロポーザル作成、ディスカッションへの参加、中間発表会でのプレゼン：40%

リサーチペーパー：60%

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1

上神 貴佳 / 三浦まり『日本政治の第一歩』〔新版〕(有斐閣ストウディア)、2023年

村田 晃嗣, 君塚 直隆, 石川 卓, 栗栖 薫子, 秋山信将 『国際政治学をつかむ』〔第3版〕(Textbooks tsukamu) 単行本 - 2023年

4-2

スティーヴン・ヴァン＝エヴェラ『政治学のリサーチ・メソッド』野口和彦、渡辺紫乃訳、勁草書房、2009年
マーク・トラクテンバーグ『国際関係史の技法』村田晃嗣・中谷直司・山口航訳、ミネルヴァ書房、2022年。

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

講義は日本語で行うが、英語でリサーチペーパー作成することを奨励される。英語での論文作成は、CPC (Center for Professional Communication) の支援を受けることができる。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1011J
授業名	国際安全保障
担当者	HYODO Shinji／兵頭 慎治
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

安全保障戦略課程における導入講座である。国際安全保障に関する基礎知識を修得した上で、日本を含めた国際社会が直面する安全保障上の課題について考察する。

[到達目標]

国際安全保障に関する基礎知識を修得した上で、日本を含めた国際社会が直面する安全保障上の課題について考察する。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

2. 各授業のテーマ：

第1回 国際安全保障論概説

第2回 国際政治学概説

第3回 地政学概説

第4回 戦略論概説

第5回 戦争の本質と軍事力の諸相

第6回 戦略的コミュニケーション

第7回 日本の安全保障

第8回 まとめ（レポートの作成）

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう。

3. 成績の評価方法：

レポート（100%）

与えられたテーマに関するレポートを第8回目の授業時に作成する。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：（4-1:必携のテキスト 4-2:その他）

第1回	必なし
読考	
第2回	必ジョセフ・ナイ、デイヴィット・ウェルチ『国際紛争——理論と歴史』原書第10版、有斐閣、2017年、第二章。
読考	
第3回	必なし
読考	
第4回	必なし
読考	ローレンス・フリードマン『戦争の将来』(中央公論新社、2021年) Lawrence Freedman, <i>The Future of War: A History</i> (Public Affairs, 2017)
第5回	必1 ダニエル・カーネマン『ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか?』(上)(早川書房、2014年)、第19章、20章[Daniel Kahneman, <i>Thinking, Fast and Slow</i> , Chapters 19 and 20.] 2 吉崎知典「ウクライナ危機とNATO：同盟の戦略概念への含意」『CISTECジャーナル』No.199 (2022年5月)
参考	1 ローレンス・フリードマン『戦略の世界史(下)』(2018年) 36-38章 (Lawrence Freedman, <i>Strategy</i> , Oxford U.P., 2013, Chapters 36-38) .ナシーム・ニコラス・タレブ『ブラック・スワン』(上・下)ダイヤモンド社、2009年 2 吉崎知典「NATO結束のディレンマ：ウクライナ、ポピュリズム、コロナ危機」『国際安全保障』第48巻第4号(2021年3月) 59-75頁[S1]
第6回	必石津朋之著『戦争学原論』(筑摩書房、2013年)
読考	
第7回	必1 『戦略的コミュニケーションと国際政治－新しい安全保障の論理』(日経出版、2022年10月) 2 「戦略的コミュニケーションと防衛外交」渡部・西田共編『防衛外交とは何か』(勁草書房、2021年)
参考	1 "The Indo-Pacific, Geopolitics, and Strategic Communications: Construction of the Indo-Pacific," <i>Defence Strategic Communications</i> 14 (Riga: NATO SC COE Spring 2024) 2 Change through Resonance in Classical Ballet / A Review Essay by Chiyuki Aoi, <i>Defence Strategic Communications</i> 15 (Riga: NATO SC COE Spring 2025) https://stratcomcoe.org/publications/defence-strategic-communications-volume-15-spring-2025/322/
第8回	必なし
読考	
第9回	7参1 秋山昌廣・小黒一正編『論点解説 日本の安全保障』日本経済新聞出版、2025年2月。(徳地執筆部分は論点解説でも適宜目を通していただけると幸いです。) 2 Hideshi Tokuchi, "The Japan-U.S. Alliance under New Leadership in Tokyo and Washington, DC," <i>Saigyo</i> 28, 2025, https://spfusa.org/publications/the-japan-u-s-alliance-under-new-leadership-in-tokyo-and-washington-dc/ 3 徳地秀士「今こそ自衛隊は日米同盟の強化に力を発揮せよ」『隊友』2025年4月5日、2頁。 4 徳地秀士「ウクライナ戦争への対応から今の米国を考える」『宮古新報』2025年4月13日、1頁。 5 Hideshi Tokuchi, "U.S. Foreign Policy under President Trump, the Japan-U.S. Alliance and the Peace Strait," <i>Prospect & Exploration (展望與探索)</i> , Vol. 23, No. 6, June 15, 2025, pp. 77-93, https://www.mjib.gov.tw/FileUploads/eBooks/72f08ea13754401488b532cdeef1780d/Section_file/2e20250615.pdf

第8回	必読	なし
参考文献		なし

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1013J
授業名	法と安全保障
担当者	EIFUKU Seiya／永福 誠也
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

● 本授業の概要]

安全保障にかかわる憲法、国内防衛法制及び国際法の基本概念や法原則について講義を行う。特に憲法については、日米安保・国際協調主義と9条との関係、国際法については、海洋・空・宇宙など空間にかかわる論点や、紛争解決、武力行使関連問題など様々な論点を扱う。

[到達目標]

本授業の到達目標は以下のとおりである。

- ・ 武力の行使、海洋、宇宙等、安全保障に関係する国際法及び防衛法制に関する学術文献の内容を理解して説明できる。
- ・ 諸外国及び国際組織等の安全保障政策指針の内容について、国際法の規則に照らし、その適否等を判断できる。
- ・ 我が国の安全保障政策に関し、憲法及び防衛法制上の基本事項・留意点を説明できる。
- ・ 我が国の安全保障政策に係る各種指針に関し、国際法及び憲法並びに防衛法に適った起案ができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

DP④組織のリーダーとして、必要な情報を提供し、また問題解決方法を提示する能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 憲法と安全保障（1）：憲法9条の内容の由来等
- 第2回 憲法と安全保障（2）：憲法9条と日米安保・国際協調主義との関係
- 第3回 防衛法制
- 第4回 国際法（安全保障をめぐる最近の諸課題と国際法）
- 第5回 国際法（紛争の解決と海洋における法の支配の実現）
- 第6回 国際法（空・宇宙法）
- 第7回 国際法（武力行使関連）
- 第8回 まとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

授業への貢献度（50％）、レポート（50％）

レポートは、講義全般に係る課題（テーマ）を講座の開始時（第1回講義の前）に提示する。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読 なし

参考

- 1 篠田英朗『はじめての憲法』ちくまプリマー新書、2019年)
- 2 同『憲法学の病』(新潮新書、2019年)
- 3 同『ほんとうの憲法』(ちくま新書、2017年)
- 4 同『国家主権という思想—国際立憲主義への軌跡』(勁草書房、2012年)

第2回

必読 なし

参考

- 1 篠田英朗『戦争の地政学』(講談社新書、2023年)
- 2 同『集団的自衛権で日本は守られる』(PHP、2022年)
- 3 同『パートナーシップ国際平和活動』(勁草書房、2021年)
- 4 同『集団的自衛権の思想史—憲法9条と日米安保』(風行社、2016 年)

第3回

必読 なし

参考

【概説書】

- 1 田村重信編著『新・防衛法制』(内外出版、2018年)
- 2 西修・浜谷英博・高井晋・松浦一夫・富井幸雄『日本の安全保障法制』(内外出版、2001年)
- 3 安田寛『防衛法概論』(オリエント書房、昭和54年)
- 4 宇都宮静男監修『防衛法』(自由国民社、1974年)
- 5 田上穰治、杉村敏正『防衛法』(法律学全集12-II)(有斐閣、1958年)

【テーマ別】

- 1 冷戦下の自衛隊(防衛白書昭和63年版、第3部(HP版))
- 2 国際貢献(防衛白書平成3年版、第3章)
- 3 事態対処法制整備(防衛白書平成17年版、第3章第3節)
- 4 本来任務化(防衛白書平成18年版、第2章第4節)
- 5 平和安全法制整備(防衛白書平成28年版第Ⅱ部第3章)

第4回

必読

- 1 中谷和弘「国際法から見たエネルギー安全保障及び食料安全保障」『国際法研究』第13号(2024年3月)120-137頁。
- 2 同「国際法からみた経済安全保障の諸相」『研究レポート』日本国際問題研究所(2023年12月12日)
- 3 同「サイバー諜報と国際法」『国際法外交雑誌』第122巻第1号(2023年5月)1-21頁。
- 4 同「米ソ核戦争防止協定の作成における英国外交官の関与」『国際法研究』第12号(2023年5月)170-191頁。
- 5 同「尖閣諸島、竹島、国際裁判」内閣府：尖閣諸島研究・解説サイト(2020年12月18日)
- 6 同「エストニアのデータ大使館と国際法」『国際法研究』第10号(2022年3月)186-197頁。
- 7 同「中国による南シナ海の違法な人工島建設の法的結果」『島嶼研究ジャーナル』第11巻第1号(2021年10月)18-28頁。
- 8 同「米国法と中国法の域外適用の板挟みになる日本企業」『国際商事法務』第49巻第4号(2021年)455-460頁。
- 9 同「タリンマニュアルについて」『サイバー攻撃の国際法：タリンマニュアル2.0の解説(増補版)』(信山社、2023年)3-11頁。
- 10 同「南シナ海中仲裁判断と海洋における法の支配」『国際問題』No.659(2017年3月)1-3頁。

- 11 同「ホルムズ海峡と国際法」坂元茂樹編著『国際海峡』（東信堂、2015年）129-155頁。
- 12 同「米中軍用機接触事件と国際法」『法学教室』No.252（2001年9月）49-54頁。
- 13 同「経済的威圧とそれへの反応措置の国際法上の評価」『CISTEC Journal』第216号（2025年3月）259-266頁。

参考 なし。

第5回

必読 なし

参考

- 1 浅田正彦編『国際法（5版）』（東信堂、2022年）231-261頁。
- 2 岩沢雄司『国際法（第2版）』（東京大学出版会、2023年）251-308、593-670頁。
- 3 山本草二『海洋法』（三省堂、1992年）。
- 4 李禎之「南シナ海仲裁手続きの訴訟法的含意」『国際法外交雑誌』第117巻第2号、2018年8月、30-49頁。
- 5 永福誠也「裁判と裁判外紛争解決」『防衛研究所ブリーフィング・メモ』（2017年5月号）。
- 6 永福誠也「中国の主張の国際法に照らした評価」『NIDSコメンタリー』（2024年第355号）
- 7 J. Crawford, Brownlie's Principles of International Law (9th ed.), Oxford University Press, 2019, pp. 692-716.
- 8 D. R. Rothwell and T. Stephens, The International Law of the Sea (3rd ed.), Hart Publishing, 2023.
- 9 R. R. Churchill and A.V. Lowe, The Law of the Sea (4th ed.), Manchester University Press, 2022.

第6回

必読 なし

参考

- 1 橋本靖明「宇宙と安全保障の歴史」渡邊浩崇編著『宇宙の研究開発利用の歴史 日本はいかに取り組んできたか』（大阪大学出版会、2022年）149-179頁。
- 2 杉原高嶺『国際法学講義』（有斐閣、2008年）第13章（351-359頁）。

第7回

必読 なし

参考

- 1 浅田正彦「ウクライナ戦争と国際法」浅田正彦・玉田大編著『ウクライナ戦争と』（東信堂、2023年）5-37頁。
- 2 黒崎将広他『防衛実務国際法』（弘文堂、2021年）505-527頁。
- 3 浅田正彦編『国際法（5版）』（東信堂、2022年）231-261頁。
- 4 岩沢雄司『国際法（第2版）』（東京大学出版会、2023年）677-748頁。
- 5 オスカー・シャクター『現代国際法の理論と実践』長谷川正国訳（信山社、2020年）133-226、465-497頁。
- 6 永福誠也「ロシアによるウクライナ侵略と国際裁判所」『NIDSコメンタリー』（2023年第265号）
- 7 Emily Crawford and Alison Pert, International Humanitarian Law (3rd ed.), Cambridge University Press, 2024.
- 8 Oscar Schachter, International Law in Theory and Practice, Mrtinus Nijhoff, 1991, pp. 106-183, 389-417.

第8回

必読 なし

参考 なし

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1015J
授業名	米国の安全保障政策
担当者	Arakaki Hiromu／新垣 拓
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

米国の安全保障政策の展開と課題を分析し、我が国を含む東アジアの安全保障に対するインプリケーションを考察する。

[到達目標]

米国の安全保障に関する各政策領域の概要を説明することができる。米国の安全保障に関する各政策領域における課題を説明することができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 米国の国防政策

第2回 米国の内政と安全保障政策

第3回 米国の対中政策

第4回 米国の新領域安全保障

第5回 米国の不拡散政策

第6回 米国の宇宙政策

第7回 米国の軍事戦略

第8回 まとめ

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

●

「米国の安全保障政策」に関連したテーマ（これに関係するものであれば、具体的なトピックの選定は自由）で、A4×5枚程度のペーパーを作成し、2026年1月10日（水）正午までに担当者（arakaki-h@nids.go.jp）に送付すること。

3. 成績の評価方法：

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読／参考 なし

第2回

必読／参考 なし

第3回

必読 なし

参考

増田雅之編著『大国間競争の新状態』（インターブックス、2023年）

第4回

必読 なし

参考

Bryan Clark, Mark Gunzinger, and Jesse Sloman, "Winning in the Gray Zone: Using Electromagnetic Warfare to Regain Escalation Dominance," (CSBA, 2017).

[<https://csbaonline.org/research/publications/winning-in-the-gray-zone-using-electromagnetic-warfare-to-regain-escalation>]

第5回

必読

秋山信将、菊地昌廣、浅田正彦、宮本直樹「第2章 核兵器の不拡散」、黒澤満編著『軍縮問題入門』（第4版）（東信堂、2012年）、42-83頁

参考 なし

第6回

必読 なし

参考

1 福島康仁「米国における2つの宇宙軍創設—創設の経緯・意図と立ち上げ状況の評価—」『安全保障戦略研究』第2巻第2号（2022年3月）63～79頁。

2 福島康仁「シスルナ安全保障—シスルナ空間における米中の活動と今後の論点—」『安全保障戦略研究』第3巻第2号（2023年3月）1～22頁。

第7回

必読 なし

参考

1. 菊地茂雄「中国の軍事的脅威に関する認識変化と米軍作戦コンセプトの展開——統合全ドメイン指揮統制（JADC2）を中心に——」『安全保障戦略研究』第2巻第2号（2022年3月）23～62頁

<http://www.nids.mod.go.jp/publication/security/pdf/2022/202203_02.pdf>

2. 菊地茂雄「沿海域作戦に関する米海兵隊作戦コンセプトの展開—「前方海軍基地」の「防衛」と「海軍・海兵隊統合（Naval Integration）」—」『安全保障戦略研究』第1巻第1号（2020年8月）55～81頁

<http://www.nids.mod.go.jp/publication/security/pdf/2020/08/202008_04.pdf>

3. 菊地茂雄「米陸軍・マルチドメイン作戦（MDO）コンセプト—「21世紀の諸兵科連合」と新たな戦い方の模索—」『防衛研究所紀要』第22巻第1号（2019年11月）15～58頁

<http://www.nids.mod.go.jp/publication/kiyo/pdf/bulletin_j22_1_2.pdf>

第8回

必読／参考 なし

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1016J
授業名	東アジアの安全保障 1
担当者	YAMAGUCHI Shinji／山口 信治
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

● 本授業の概要]

中国の安全保障政策の展開を分析し、東アジアの戦略環境に与える影響を考察する。この際、偏見や誤解を避けた等身大の中国を理解するために必要な基礎知識に加え、東アジア地域と我が国のインプリケーションを持つかを重視しつつ、理解を促進する。

[到達目標]

- ・中国の安全保障をめぐる状況全般について、論理的議論を進めるのに必要な基礎的な知見を得てそれを説明できる。
- ・中国の軍事組織や軍事戦略について、知見を得て説明できる。
- ・中国の軍事・安全保障に関する学術論文を理解し、論点を説明できる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 現代中国の軍事・国防
- 第2回 中国の安全保障概念
- 第3回 中国の海洋戦略
- 第4回 中国の外交戦略
- 第5回 中国の新領域をめぐる安全保障
- 第6回 台湾を取り巻く安全保障環境
- 第7回 日中関係
- 第8回 まとめ

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

授業への貢献度（30％）、第8回のまとめ授業時に課すレポート（70％）

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読

1 杉浦康之『中国安全保障レポート2022 統合作戦能力の深化を目指す中国人民解放軍』（防衛研究所 2021年）

参考

1 塩沢英一『中国人民解放軍の実力』（筑摩書房 2012年）

第2回

必読

1 なし 2021年）

参考

1 川島真「外へと滲み出る内部の論理：中国の『カラー革命』認識と国家の安全」川島真・鈴木絢女・小泉悠（編）『「米中対立・新冷戦」論の死角 ユーラシアの自画像』（PHP、2023年）

2 浅野亮・土屋貴裕『習近平の軍事戦略 「強軍の夢」は実現するか』（芙蓉書房出版、2023年）

3 後藤洋平「中国が『国家安全』をめぐる白書を発行—『白書』が示す『自信』と『不安』、及び含意—」『NIDSコメンタリー』第380号（2025年6月6日）

第3回

必読

飯田将史「第10章：南シナ海へ進出する中国の狙いとその影響」加茂具樹編『中国は「力」をどう使うのか』（一藝社、2023年）

参考

1 飯田将史『海洋へ膨張する中国』（角川SSC新書、2013年）

2 飯田将史「人民解放軍の『進化』とインド太平洋の安全保障」『外交』第76巻（2022年11・12月）

3 トシ・ヨシハラ、ジェイムズ・R・ホームズ（山形浩生訳）『太平洋の赤い星』（バジリコ株式会社、2014年）

第4回

必読 なし

参考

1 増田雅之「パワー・トランジション論と中国の対米政策」『神奈川大学アジア・レビュー』第2号（2015年3月）

2 増田雅之「対立への岐路に立つ中国の対米政策」川島真・森聡編『アフターコロナ時代の米中関係と世界秩序』（東京大学出版会、2020年）

3 『中国安全保障レポート2020—ユーラシアに向かう中国』

第5回

必読 なし

参考

1 『中国安全保障レポート2021 新時代における中国の軍事戦略』

2 八塚正晃「中国人民解放軍の智能化戦争」『安全保障戦略研究』（防衛研究所、2020年）

第6回

必読 なし

参考

1 野島剛『台湾とは何か』（筑摩書房、2016年）

2 佐橋亮『米中対立—アメリカの戦略転換と分断される世界』（中公新書、2021年）

第7回

必読

1 山口信治「日本と中国—中国台頭に対するファーストレスポンスとしての日本」鶴岡路人編『地政学時代の日本』Adenauer Stiftung, 2024年。

参考

- 1 高原明生・服部龍二編『日中関係史 1972-2012 政治』（東京大学出版会 2012年）
- 2 國分良成『中国政治から見た日中関係』（岩波書店、2017年）

第8回

必読／参考 なし

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

単位が必要なものは必ずレポートを提出すること。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1017J
授業名	戦争史原論
担当者	SHIMIZU Ryotaro／清水 亮太郎
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

安全保障問題・防衛政策を検討する際に必要とされる戦争史の基礎を考察する。特に、21世紀における世界の戦略環境及び日本の安全保障問題を理解するために、戦争の本質について歴史的観点から多角的に検討を加える。

[到達目標]

- ①近代（概ね17世紀以降）から現代に至る戦争の歴史を概念的、理論的に理解するための（様々な）視座を身につけてその内容を説明できる。
- ②その知識を応用して現在の安全保障上の諸課題を検討、分析できる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 戦争と国家
- 第2回 戦争と社会
- 第3回 戦争と技術
- 第4回 戦争と情報
- 第5回 戦争と宗教
- 第6回 戦争と平和
- 第7回 戦争と歴史認識
- 第8回 まとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

期末レポート（100%、全授業終了後に実施）

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読

- 1 長尾雄一郎「戦争と国家」加藤朗他著『戦争—その展開と抑制』（勁草書房、1997年）、1-21頁
- 2 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『増補版 現代政治の思想と行動』（未来社、1964年）、11-28頁〔英語版：Masao Maruyama, "Theory and Psychology of Ultra-Nationalism," *Thoughts and Behavior in Modern Japanese Politics*, pp.1-24 (Oxford UP, 1969)]

参考

- 1 マイケル・ハワード『改訂版・ヨーロッパ史における戦争』（中公文庫、2010年）〔英語版：Michael Howard, *War in European History* (Oxford UP, 2009)

第2回

必読

- 1 石津朋之『戦争学原論』（筑摩書房、2013年）、208-249頁
- 2 石津朋之「総力戦と社会の変化」三宅正樹他編『総力戦の時代』（検証 太平洋戦争とその戦略1）（中央公論新社、2013年）、59-95頁

参考

- 1 石津朋之『10人の思想家から学ぶ 軍事戦略入門』（平凡社2025年）
- 2 マーチン・ファン・クレフェルト（石津朋之監訳）『戦争の変遷』（原書房2011年）

第3回

必読 なし

参考

- 1 ジェフリー・パーカー（大久保桂子訳）『長篠合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃1500～1800年』（同文館、1995年）
- 2 アレックス・ローランド（塚本勝也訳）『戦争と技術』（創元社、2020年）

第4回

必読

- 1 小谷賢『インテリジェンス』（ちくま学芸文庫、2012年）、第1～第3章
- 2 清水亮太郎「第二次世界大戦期中立国における国際情報戦：スウェーデン、スイスにおける日本陸海軍駐在武官を焦点として」『安全保障戦略研究』5巻2号（2025年、防研HPよりダウンロード可）参考
- 1 ジョン・キーガン『情報と戦争』（中央公論新社、2018年）
- 2 森山優『日米開戦と情報戦』（講談社現代新書、2016年）

第5回

必読

- 1 石津朋之「戦争と宗教—十字軍と三〇年戦争を事例として」『戦史研究年報』（防衛研究所）第23号、2020年3月（防研HPよりダウンロード可）

参考

- 1 山内進『十字軍の思想』（ちくま新書、2003年）

第6回

必読 なし

- 参考 E. H. カー（原彬久訳）『危機の20年—理想と現実』（岩波書店、2011年）

第7回

必読

- 1 庄司潤一郎「戦後日本における歴史認識」『防衛研究所紀要』第4巻第3号（2002年2月）、100-119頁
- 2 庄司潤一郎「『日中歴史共同研究』を振り返って」笠原十九司編『戦争を知らない国民のための日中歴史認識』（勉誠出版、2010年）、93-118頁
- 3 庄司潤一郎「歴史認識をめぐる日本外交」『国際政治』第170号（2012年10月）

参考

- 1 波多野澄雄『日本の歴史問題 改題新版—「帝国」の清算から靖国、慰安婦問題まで』（中公新書、2022年）
- 2 大沼保昭『「歴史認識」とは何か—対立の構図を超えて』（中公新書、2015年）
- 3 庄司潤一郎「日本における戦争呼称に関する問題の一考察」『防衛研究所紀要』第13巻第3号（2011年3月）、44-79頁

第8回

必読／参考 なし

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1018J
授業名	冷戦と日本の安全保障政策
担当者	TACHIKAWA Kyoichi／立川 京一
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

冷戦期における国際政治上の諸事象と日本の安全保障政策の歴史的展開に関する知識を修得し、将来の防衛政策を探究する。

[到達目標]

現在、あるいは将来の防衛政策上の課題について、歴史的な知見に基づいた理解、洞察を可能とする視座を修得しその理解を深める。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 冷戦概論

第2回 ヨーロッパの冷戦

第3回 アジアの冷戦

第4回 朝鮮戦争・ベトナム戦争

第5回 日本の安全保障政策（1）

（戦後安全保障政策の形成）

第6回 日本の安全保障政策（2）

（高度成長から大綱・ガイドラインへ）

第7回 日本の安全保障政策（3）

（新冷戦と日本のグローバル・コミットメント）

第8回 まとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるようにする。

3. 成績の評価方法：

第7回終了時に課す期末レポート（100%）

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読

1 滝田賢治「冷戦概念と現代国際政治史－日米における議論を基礎に－」細谷千博・丸山直起編『ポスト冷戦期の国際政治』2-24頁

2 田中明彦『新しい中世－相互依存深まる世界システム－』（日経ビジネス人文庫、日本経済新聞社、2003年）15-42頁

参考

1 マイケル・L・ドックリル、マイケル・F・ホプキンス『冷戦1945-1991』（岩波書店、2009年）

2 佐々木卓也『冷戦－アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い－』（有斐閣、2011年）

3 ジョゼフ・S・ナイ・ジュニア、デイヴィッド・A・ウェルチ『国際紛争－理論と歴史－』[原書第10版]（有斐閣、2011年）

4 松岡完・広瀬佳一・竹中佳彦編『冷戦史－その起源・展開・終焉と日本－』（同文館出版、2003年）

5 松岡完『20世紀の国際政治－二度の世界大戦と冷戦の時代－』[改訂増補版]（同文館出版、2003年）

6 ルイス・J・ハレー『歴史としての冷戦』（サイマル出版会、1967年）

7 O・A・ウェスタッド『グローバル冷戦史－第三世界への介入と現代世界の形成－』（名古屋大学出版会、2010年）

8 Jonathan Haslam, Russia's Cold War: From the October Revolution to the Fall of the Wall (New Haven: Yale University Press, 2001)

9 細谷雄一編著『戦後アジア・ヨーロッパ関係史－冷戦・脱植民地化・地域主義－』（慶應義塾大学出版会、2015年）

10 ロバート・マクマン『冷戦史』青野利彦監訳、平井和也訳（勁草書房、2018年）

11 モーリス・ヴァイス『戦後国際関係史－二極化世界から混迷の時代へ－』細谷雄一・宮下雄一郎監訳（慶應義塾大学出版会、2015年）

12 O・A・ウェスタッド『冷戦－ワールド・ヒストリー－』（上・下）益田実監訳、山本健・小川浩之訳（岩波書店、2009年）

13 青野利彦『冷戦史』（上・下）（中央公論新社、2023年）

第2回

必読

塩川伸明『冷戦終焉20年』（勁草書房、2010年）107-141頁。

参考

1 吉崎知典「冷戦と安全保障秩序の再構築－1945～59年－」臼井実穂子編『ヨーロッパ国際体系の史的展開』（南窓社、2008年）

2 金子讓『NATO北大西洋条約機構の研究』（彩流社、2008年）

3 渡邊啓貴編『ヨーロッパ国際関係史』（有斐閣、2002年）

4 ウォルター・ラカー『ヨーロッパ現代史』（全三巻）（芦書房、1998～2000年）

5 佐瀬昌盛『NATO－21世紀からの世界戦略－』（文芸春秋社、1999年）

6 植田隆子編『現代ヨーロッパ国政政治』（岩波書店、2003年）

7 ジョン・L・ギャディス「ロング・ピース－冷戦史の証言『核・緊張・平和』－」（芦書房、2002年）375-422頁

8 John Lewis Gaddis, The Long Peace: Inquiries into the History of the Cold War (Oxford: Oxford University Press, 2005)

9 ジョン・L・ギャディス『歴史としての冷戦－力と平和の追求－』（慶應義塾大学出版会、2004年）43-87頁

10 ヴォイチェフ・マストニー『冷戦とは何だったのか－戦後政治史とスターリン－』（柏書房、2000年）

第3回

必読

国分良成「東アジアにおける冷戦とその終焉」鴨武彦編『講座世紀間の世界政治 3 アジアの国際秩序－脱冷戦の影響－』36-91頁

参考

1 下斗米伸夫『アジア冷戦史』（中央公論新社、2004年）

2 マイケル・シャラー『アジアにおける冷戦の起源－アメリカの対日占領－』（木鐸社、1996年）

3 マイケル・シャラー『「日米関係」とは何だったのか－占領期から冷戦終結後まで－』（草思社、2004年）

4 赤木完爾・今野茂充編著『戦略史としてのアジア冷戦』慶應義塾大学出版会、2013年。

5 Tsuyoshi Hasegawa, ed., The Cold War in East Asia, 1945-1991 (Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 2002)

6 原貴美恵『サンフランシスコ平和条約の盲点－アジア太平洋地域の冷戦と「戦後未解決の諸問題」－』（溪水社、2005年）

7 立川京一「日本とアジアにおける初期の冷戦」『戦史研究年報』第8号（2005年3月）

第4回

必読

ジョン・L・ギャディス『歴史としての冷戦－力と平和の追求－』（慶應義塾大学出版会、2004年）第3章：89-135頁、第4章：136-246頁、第5章：247-266頁、第8章：359-420頁

参考

- 1 神谷不二『朝鮮戦争－米中対決の原形－』（中央公論社、1966年）
- 2 赤木完爾編著『朝鮮戦争－休戦50周年の検証・半島の内と外から－』（慶應義塾大学出版会、2003年）第13章
- 3 赤木完爾「朝鮮戦争史研究の10年」『軍事史学』第46巻第1号（2010年6月）
- 4 『朝鮮戦争と日本』（防衛研究所、2013年）
- 5 赤木完爾『ヴェトナム戦争の起源－アイゼンハワー政権と第一次インドシナ戦争－』（慶應通信、1991年）
- 6 松岡完『ベトナム戦争－誤算と誤解の戦場－』（中央公論新社、2001年）
- 7 ジョージ・C・ヘリング『アメリカの最も長い戦争』全2冊、秋谷昌平訳（講談社、1986年）
- 8 赤木完爾「朝鮮戦争と核兵器」『慶應の政治学－国際政治 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集』（慶應義塾大学）
- 9 赤木完爾・今野茂充編著『戦略史としてのアジア冷戦』（慶應義塾大学出版会、2013年）第3章 赤木完爾「大量報復」第5回

必読

五百旗頭真編『戦後日本外交史〔第3版補改訂〕』（有斐閣、2014年）第1章～2章[Makoto Iokibe ed., The Diplomats of Japan (NY: Routledge, 2011), Chapter 1 & 2]

参考

- 1 植村秀樹『再軍備と55年体制』（木鐸社、1995年）
- 2 坂元一哉『日米同盟の絆－安保条約と相互性の模索〔増補版〕』（有斐閣、2020年）
- 3 中島信吾『戦後日本の防衛政策－「吉田路線」をめぐる政治・外交・軍事』（慶應義塾大学出版会、2006年）
- 4 増田弘『自衛隊の誕生－日本の再軍備とアメリカ』（中央公論新社、2004年）
- 5 読売新聞戦後史班編『「再軍備」の軌跡』（読売新聞社、1981年）

第6回

必読

五百旗頭真編『戦後日本外交史〔第3版補改訂〕』（有斐閣、2014年）第3章～4章[Makoto Iokibe ed., The Diplomats of Japan (NY: Routledge, 2011), Chapter 3 & 4]

参考

- 1 五百旗頭真編『日米関係史』（有斐閣、2008年）
- 2 真田尚剛『「大国日本」の防衛政策－防衛大綱に至る過程 1968～1976年』（吉田書店、2021年）
- 3 千々和泰明『安全保障と防衛力の戦後史 1971～2010 「基盤的防衛力構想」の時代』（千倉書房、2021年）
- 4 特集「『防衛計画の大綱』の多角的研究」『国際安全保障』第44巻第3号（2016年12月）
- 5 田中明彦『20世紀の日本 2 安全保障』（読売新聞社、1997年）
- 6 中島信吾『戦後日本の防衛政策－「吉田路線」をめぐる政治・外交・軍事－』（慶應義塾大学出版会、2006年）
- 7 吉田真吾『日米同盟の制度化－発展と深化の歴史過程』（名古屋大学出版会、2012年）

第7回

必読

1 Narushige Michishita, “The U.S. Maritime Strategy in the Pacific during the Cold War,” in Sebastian Bruns and Papadopoulos, eds., Conceptualizing Maritime and Naval Strategy: Festschrift for Peter M. Swartz, Captain (USN), U.S. Naval Academy (Annapolis, MD: Nomos, 2020)

2 Narushige Michishita, Peter M. Swartz, and David F. Winkler, Lessons of the Cold War in the Pacific: U.S. Military Strategy, Prevention, and Japan’s Role (Woodrow Wilson Center, 2016),

https://www.wilsoncenter.org/sites/default/files/media/documents/publication/lessons_of_the_cold_war_in_the_pacific.pdf

参考

- 1 Michael J. Green, “The Search for an Active Security Partnership: Lessons from the 1980s,” in Akira Iriye and John G. Iriye, eds., Partnership: the United States and Japan, 1951-2001 (Tokyo: Kodansha International, 2001), pp. 135-151
- 2 マイケル・ジョナサン・グリーン「能動的な協力関係の構築に向けて－冷戦後の同盟漂流に対する80年代の教訓」入浦英一編『日米戦後関係史1951～2001』細谷千博、有賀貞訳、講談社インターナショナル、2001年
- 3 西村繁樹『防衛戦略とは何か』PHP新書、2012年、第2、3、8、9章
- 4 John F. Lehman, Jr., Oceans Ventured: Winning the Cold War at Sea (Norton, 2018)
- 5 Narushige Michishita, Peter Swartz, and David Winkler, “U.S.-Japan Military Strategies in the Pacific (video) 2016, <http://www.c-span.org/video/?406041-1/usjapan-military-strategies-Pacific>
- 6 外岡英俊、本田優、三浦俊章『日米同盟半世紀－安保と密約－』朝日新聞社、2001年（「『新冷戦』の到来」章）
- 7 「日米安保 第二部 共同作戦計画」『朝日新聞』1996年9月2-6日
- 8 朝日新聞「自衛隊50年」取材班『自衛隊－知られざる変容－』（朝日新聞社、2005年）第7章、283-326頁

9 西村繁樹『「戦略」の強化書』（芙蓉書房出版、2009年）、325-357頁、385-415頁

10 大賀良平、竹田五郎、永野茂門『シンポジウム 日米共同作戦—日米対ソ連の戦い』防衛選書3、麴町書房、1982年

11 「冷戦期の『海洋戦略』における核兵器の役割—太平洋戦域を中心に」核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義
研究大学院大学、2018年2月10日

12 John B. Hattendorf, The Evolution of the U.S. Navy's Maritime Strategy, 1977-1986, Naval War College N
(Newport, Rhode Island: Naval War College, 2004)

13 道下徳成「第8章 インド太平洋地域のパワーシフト—中国の台頭と日本の対応」庄司潤一郎、石津朋之共編『地政学
版、2020年

14 Narushige Michishita, "Japan's Grand Strategy for a Free and Open Indo-Pacific," The Oxford Handbook of
(Oxford University Press, 2021)

15 板山真弓『日米同盟における共同防衛体制の形成—条約締結から「日米防衛協力のための指針」策定まで』ミネル

16 防衛研究所および政策研究大学院大学の各種オーラル・ヒストリー

17 道下徳成「太平洋戦域における軍事作戦の変遷—冷戦期と現在の経空攻撃作戦をめぐる攻防を中心に」『エア・ア
究』2020年12月号

第8回

必読／参考 なし

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

Academic Year (April - March of the next year)	2025
Course Number	SSP1101E
Course Name	Introduction to Japan's Security
Instructor	MAEDA Yuji／前田 祐司
Email Address	
Term／Day／Period	Fall (Session I) 秋前
Credits	1

1. Course Description and the Learning Objectives :

[Course Description]

An introductory opportunity both for international students to start studying the key subjects of Japanese security and for Japanese students to discuss Japan in English.

[Course Goals]

Students acquire basic knowledge of the history and current challenges of Japanese national security and can explain these.

Students become able to discuss key topics of Japanese security in English.

[Related Diploma Policy (DP)]

Strategic Studies Program

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

2. Course Outline :

- Week1 Introduction
- Week2 Japan and the changing hub-and-spokes alliance system
- Week3 Japan as a First Responder to China's Rise
- Week4 Japan and the Two Koreas
- Week5 Japan-ASEAN Security Cooperation
- Week6 Russia in East Asia
- Week7 European Security
- Week8 Final Presentations and Wrap up

[Out-of-course Learning]

Read the textbook/handouts/related materials in advance. After the lectures, students should summarize what he/she has learned and apply it to the next lecture. Prepare a short presentation for the final session (a topic of your choosing, as long as it is related to the main subject.)

3. Grading :

Contribution to class discussion (50%), Final presentation (50%)

[Evaluation Criteria]

Student's achievement of the Course Goals is:

A: Achieved the goal at a high level

B: Achieved the goal at a satisfactory level

C: Achieved the goal at a generally acceptable level
D: Achieved the goal at a minimum acceptable level
E: Did not achieve the goal

4. Textbooks : (4-1:Required 4-2:Others)

Week1

Required: Sheila A. Smith, *Japan Rearmed: The Politics of Military Power* (Harvard University Press, 2019), esp. Introduction and Chapter 1.

Others: none

Week2

Required: Yusuke Ishihara, "Japan's Grand Strategy as a Declining Power," East Asia Forum, 18 June 2023.

Others: none

Week3

Required: none

Others: none

Week4

Required: none

Others: none

Week5

Required: none

Others: none

Week6

Required: none

Others: none

Week7

Required: none

Others: none

Week8

Required: none

Others: none

5. Software Used in Lectures :

6. Auditing ; Allow or Not Allow :

Not Allow

7. Note :

None

Back

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2102J
授業名	中東の安全保障問題
担当者	KOZUKA Ikuya／小塚 郁也
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

「アラブの春」以降激変する中東の安全保障問題について、基本文献を講読するとともに、討議を通じて理解を深める。

[到達目標]

「アラブの春」以降激変する中東の安全保障問題について理解し、説明することができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 講師による最近の中東情勢の解説。分担の割り当て

テキストに関する質疑応答

第2回 テキスト（1）序章、第1章に関する発表及び討議

第3回 テキスト（1）第2章、第3章に関する発表及び討議

第4回 テキスト（2）第9章、第10章に関する発表及び討議

第5回 テキスト（2）第13章、第14章に関する発表及び討議

第6回 自由研究

第7回 研修員自由研究に関する発表及び討議（1）

第8回 研修員自由研究に関する発表及び討議（2）

- ・ 課題：研修員は各自セミナー当日までに文献を詳読する。発表者はレジюмеを作成の上、当日参加者全員に配布して発表する。発表者以外の研修員は、レジюмеの内容について討議を行う。

【授業外学修】

課題：各自セミナー当日までに文献を詳読する。

3. 成績の評価方法：

研修員発表時の議論その他のパフォーマンス（50％）、レジюмеの内容（50％）。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必修のテキスト

テキスト（１）：福富満久『Gゼロ時代のエネルギー地政学－シェール革命と米国の新秩序構想』（岩波書店、2015年1月）。

テキスト（２）：ロバート・D・カプラン（櫻井祐子訳）『地政学の逆襲－「影のCIA」が予測する覇権の世界地図』（朝日新聞出版、2014年12月）。

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は日本語。講師による論文指導を希望する者は、必ず受講すること。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2104J
授業名	軍事史史料とこれからの文書・資料
担当者	KANNO Naoki／菅野 直樹
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

防研所蔵史料等に接し、戦史に関して認識を深めることを目指す。加えて、文書の一部が時代を経て史料になっていくという見地から、史資料の存在と生成について知見を深める。

[到達目標]

防研所蔵の史料と、戦史に関するさまざまな議論の関連につき認識し説明できる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP④組織のリーダーとして、必要な情報を提供し、また問題解決方法を提示する能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 重要史料と近代日本軍事史

第2回 戦史史料所蔵の沿革、公開の状況等

第3回 筆跡判読の体験

第4回～第8回 履修者報告

（第8回には講評も実施）。

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

授業への貢献度（50％）、報告（50％）。なお筆跡判読の力量については評価対象としない。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

授業で通知する。

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2114J
授業名	海洋安全保障
担当者	EIFUKU Seiya／永福 誠也
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

〔本授業の概要〕

海洋安全保障に関する政策立案・理解のための基礎的素養を涵養するため、海洋安全保障にかかわる基盤的原理及び海洋戦略に関する講義、海洋法制の分析検討、海洋安全保障に関する事例研究を実施する。

〔到達目標〕

本授業の到達目標は以下のとおりである。

- ・海洋安全保障に関する諸外国及び国際組織等の政策指針並びに海洋安全保障に関係する学術文献の内容を理解し説明できる。
- ・海洋安全保障に関する諸外国及び国際組織等の政策指針等を確認し、その特徴及び適否等について分析評価できる。
- ・我が国の海洋安全保障に関する政策指針及び具体的政策の特徴並びに課題等を説明できる。
- ・我が国の海洋安全保障政策に係る各種指針に関し、国際法及び我が国関連法規、我が国及び我が国周辺並びに国際社会全般の諸事情を踏まえ、適切な起案ができる。

〔関連するディプロマ・ポリシー〕

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 導入講義：海洋安全保障の意義等
- 第2回 海洋法制①：国連海洋法条約
- 第3回 海洋法制②：航行の自由
- 第4回 海洋戦略：特別講義
- 第5回 事例研究①：南シナ海問題
- 第6回 事例研究②：海上交通路の安全確保
- 第7回 事例研究③：日本の取組
- 第8回 まとめ：総括討議

〔授業外学修〕

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

授業への貢献度（50％）、プレゼンテーション（報告）（50％）

- ・授業への貢献度は、各回次の報告者への質問及び報告者からの回答に対する評価・コメント、当該回次のテーマに関する細部論点提起と自らの意見提示、他の参加者の意見提示に関する評価・コメント等により評価する。
- ・プレゼンテーション（報告）は、各回次のテーマに係る指定文献について報告担当者として①作成したレジュメの内容、②当該レジュメに基づく報告、③報告内容に対する質問への応答について評価する。報告レジュメに含め

るべき内容は次のとおり：１）問題の所在、２）当該問題の分析検討、３）分析検討を踏まえた文献筆者の結論、４）当該結論に対する自らの評価及び問題に対する（又は問題解決に関する）自らの意見。

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

４．テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

内閣府「海洋基本計画（第4期）」、「国家安全保障戦略」

4-2:その他

詳細は別途提示。受講者の要望があれば、当該要望に適う文献を取り上げる。なお、基本的な参考文献は以下のとおり。

- 1 原田有、永福誠也「海洋の安全保障」『東アジア戦略概観2018』（防衛研究所、2018年）8-39頁。
- 2 永福誠也「海洋権益の保護」『アジア太平洋における海洋秩序の維持』（防衛研究所、2018年）1 45－167頁。
- 3 永福誠也「排他的経済水域での軍事活動」『日本海洋政策学会誌』第9号（2019年11月）14-33頁。
- 4 柳井俊二編『海と国際法』（信山社、2024年）5 坂元茂樹、『日本の海洋政策と海洋法(第3版)』（信山社、2023年）。
- 5 坂元茂樹、『日本の海洋政策と海洋法（第3版）』（信山社、2023年）
- 6 後潟桂太郎「海洋戦略論」（勁草書房、2019年）。
- 7 ビル・ヘイトン『南シナ海－アジアの覇権をめぐる闘争史』安原和見訳、（河出書房新社、2015年）。

５．授業で使用するソフトウェアについて：

６．聴講の可否：

否

７．履修上の注意：

受講者は各自1回報告を実施

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2137J
授業名	ロシア軍事史
担当者	HANADA Tomoyuki／花田 智之
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

ロシアに係わる軍事史への理解を深めることを目的とする。今期はロシアの対外戦略の歴史を考察するため、主に日露両国の軍事と外交に注目する。主な対象期間は、19世紀後半から冷戦初期までとする。本セミナーを通じて、受講生らが現代の日露関係への歴史的視座を獲得することができる。また、今般のウクライナ侵略に見られるロシアの大国主義の歴史的背景を理解することができる。

[到達目標]

- ・受講生らが、日露関係史およびロシア軍事史に関する基礎知識を習得しそれを説明できる。
- ・ロシアを理解することと容認することを区別して、内在的理解の難しさを学習する。ロシア中心主義（ロシア世界）や「ポストモダンの思考」を批判的に克服することを目指す。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 ロシア帝国の領土拡張と極東進出（導入講義）
- 第2回 日露戦争と日露協約（発表・討論）
- 第3回 ロシア内戦とシベリア出兵（発表・討論）
- 第4回 戦間期の日ソ関係（発表・討論）
- 第5回 ノモンハン事件と独ソ戦（発表・討論）
- 第6回 太平洋戦争の終結とソ連の対日参戦（発表・討論）
- 第7回 欧州冷戦とアジア冷戦（発表・討論）
- 第8回 歴史から見たウクライナ侵略（討論）

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

成績は、①発表（60％）、②討論への参加・貢献（40％）によって決定する。発表時期については、初回授業で受講生らの興味関心などを考慮して決定する。

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

【第1回】花田智之「ロシア帝国の領土拡張」下斗米伸夫編『ロシアの歴史を知るための50章』（明石書店、2016年）。横手慎二『日露戦争史』（中公新書、2005年）第1章。

【第2回】横手慎二『日露戦争史』第4章。黒沢文貴「ポーツマス講和条約後の日露関係」五百旗頭真ほか編『日口関係史』（東大出版会、2015年）。

【第3回】麻田雅文『シベリア出兵』（中公新書、2016年）第1章。ウラジーミル・ダツィシェンほか「ロシア東部における干渉への日本の参加」『日口関係史』。

【第4回】アナスタシア・ローシキナほか「スターリンの日本像と対日政策」『日口関係史』。田嶋信雄『日本陸軍の対ソ謀略』（吉川弘文館、2017年）第4章。

【第5回】花田智之「ソ連から見たノモンハン事件」麻田雅文編『ソ連と東アジアの国際政治1919-1941』（みすず書房、2017年）。大木毅『独ソ戦』（岩波新書、2019年）第3章。

【第6回】麻田貞雄「原爆投下の衝撃と降服の決定」細谷千博編『太平洋戦争の終結』（柏書房、1997年）。長谷川毅『暗闘』（中央公論新社、2006年）第5章前半。

【第7回】山本健『ヨーロッパ冷戦史』（ちくま新書、2021年）第1章。下斗米伸夫『アジア冷戦史』（中公新書、2004年）第1章。

4-2:その他

【参考文献】

- ・麻田雅文『日露近代史』（講談社現代新書、2018年）
- ・五百旗頭真ほか編『日口関係史』（東京大学出版会、2015年）
- ・筒井清忠編『昭和史講義』（ちくま新書、2015年）
- ・防衛研究所編『近代東アジアの軍事史』（防衛研究所、2025年）

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は日本語

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2143J
授業名	国際政治の中の韓国現代史と日韓関係
担当者	KOIKE Osamu／小池 修
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session I) 秋前
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

【本授業の概要】

朝鮮半島の安全保障問題に係るテキストの読解を通じて、①同問題に対する理解を深めるとともに②論文執筆に必要なノウハウ（テーマの見つけ方、論文の構成、資料の扱いなど）を身につけることを目指す（朝鮮半島以外のテーマで論文を書く学生にとっても有益になるよう努める）。

【到達目標】

朝鮮半島の安全保障に係る学術的成果を読解できるようになる。また、それを先行研究として整理・消化して自らの研究の資とすることができるようになる。

【関連するディプロマ・ポリシー】

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

2. 各授業のテーマ：

【文献の番号（①、②）は4. 参照】

第1回 イン트로ダクション

第2回 歴史的な文脈

小倉紀蔵『韓国の行動原理』（PHP研究所、2021年）第1、2章；

兼原信克『安全保障戦略』（日経BP、日本経済新聞出版本部、2021年）第12講

第3回 韓国の安全保障戦略

木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』シリーズ日本の安全保障6（岩波書店、2015年）第6章； 崔正勲『なぜ朝鮮半島「核」危機は繰り返されてきたのか』（クレイン、2020年）補論

第4回 北朝鮮の核戦略

倉田秀也「朝鮮労働党第8回大会「戦略的課題」と核使用原則」（2023年）

第5回 先行研究の扱い方

浅羽祐樹「国際関係論と地域研究の狭間:日韓関係研究の研究戦略」『国際政治』151号（2008年）

第6回 韓国の秩序構想と日韓関係

佐橋亮編『冷戦後の東アジア秩序形成をめぐる各国の構想』（勁草書房、2020年）第5章； 木宮正史『日韓関係史』（岩波書店、2021年）後半

第7回 朝鮮半島有事

木宮編『朝鮮半島と東アジア』第7章；

小倉『韓国の行動原理』第5章

第8回 まとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

報告（30％・初回授業で履修者の興味関心を考慮して割振り）[優野1]、討論（30％）、その他の授業への貢献（20％）、リフレクション（20％）

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

小倉紀蔵『韓国の行動原理』（PHP研究所、2021年）
兼原信克『安全保障戦略』（日経BP、日本経済新聞出版本部、2021年）
木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』シリーズ日本の安全保障6（岩波書店、2015年）
崔正勲『なぜ朝鮮半島「核」危機は繰り返されてきたのか』（クレイン、2020年）
倉田秀也「朝鮮労働党第8回大会「戦略的課題」と核使用原則」（2023年）
浅羽祐樹「国際関係論と地域研究の狭間:日韓関係研究の研究戦略」『国際政治』151号（2008年）
佐橋亮編『冷戦後の東アジア秩序形成をめぐる各国の構想』（勁草書房、2020年）第5章
木宮正史『日韓関係史』（岩波書店、2021年）

4-2:その他

- ①木宮正史『国際政治のなかの韓国現代史』山川出版社、2012年。
- ②李鍾元・木宮正史・磯崎典世・浅羽祐樹『戦後日韓関係史』有斐閣、2017年。

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1021J
授業名	紛争と国際社会
担当者	ONISHI Ken／大西 健
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

【本授業の概要】

紛争及び紛争への国際社会の関与の理論と実践を多角的に考察する。平和維持活動をはじめとする国際的関与の様々な形態や、その背景となる諸問題及び理論にも検討を加える。また、この文脈で重要性を増しつつあるアフリカの紛争についても理解を深める機会とする。

【到達目標】

- ・紛争の発生、継続、終了をもたらす要因に関する議論を理解し、それに基づき具体的な紛争の事例を複合的に説明できる。
- ・紛争に対処するための国際的取り組みについて、主体別の特徴および利点・限界を説明できる。
- ・学んだ議論を解釈・批判・応用し、自らの考えを論理的に述べることができる。

【関連するディプロマ・ポリシー】

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 国際社会の組織化と「安全と繁栄」
- 第2回 アフリカと紛争
- 第3回 難民問題と国際政治
- 第4回 停戦・和平交渉
- 第5回 人道支援
- 第6回 平和維持活動
- 第7回 治安部門改革・能力構築
- 第8回 現代紛争管理の諸問題及びまとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

授業への貢献度（20％）及び課題（80％）

課題：必読文献の一つを取り上げ、本講座で扱った内容（講義内容、他の文献読解）を踏まえながら 自分の視点で議論を行う。長さは2,000字（英語では1,000ワード）以上とし、授業最終回の1週間後に提出する。

【成績評価基準】

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読

- 1 山田哲也『国際機構論入門〔第2版〕』（東京大学出版会、2023年）
- 2 山田哲也「国際法からみた一方的分離独立と『併合』—ウクライナ東部・南部4州の法的地位」『国際問題』No.710、5-14頁
- 3 納家政嗣『国際紛争と予防外交』（有斐閣、2003年）第1章

参考

- 1 山田哲也『国連が創る秩序—領域管理と国際組織法』（東京大学出版会、2010年）
- 2 遠藤誠治、遠藤乾編『安全保障とは何か（シリーズ日本の安全保障1）』（岩波書店、2014年）

第2回

必読

- 1 武内進一「アフリカの紛争と国際社会」武内進一編『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』（アジア経済研究所、2008年）3-56頁
- 2 落合雄彦編『アフリカ安全保障論入門』（晃洋書房、2019年）43-75頁
- 3 遠藤貢「アフリカの平和活動と人間の安全保障」阪本拓人、キハラハント愛編『人間の安全保障—東大駒場15講』（東京大学出版会、2024年）

参考

- 1 武内進一編『現代アフリカの紛争—歴史と主体』（アジア経済研究所、2000年）
- 2 武内進一編『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって』（アジア経済研究所、2003年）
- 3 武内進一編『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』（アジア経済研究所、2008年）
- 4 白戸圭一『ルポ資源大陸アフリカ—暴力が結ぶ貧困と繁栄』（東洋経済新報社、2009年）
- 5 セルジュ・ミシェル、ミシェル・ブーレ（中平信也訳）『アフリカを食い荒らす中国』（河出書房新社、2009年）
- 6 P・コリアー『民主主義がアフリカ経済を殺す』（日経BP、2010年）
- 7 『アジア研ワールド・トレンド』第205号（2012年10月）
- 8 遠藤貢『崩壊国家と国際安全保障—ソマリアにみる新たな国家像の誕生』（有斐閣、2015年）
- 9 落合雄彦編『アフリカ安全保障論入門』（晃洋書房、2019年）
- 10 廣瀬陽子『ハイブリッド戦争—ロシアの新しい国家戦略』（講談社現代新書、2021年）第5章
- 11 遠藤貢、阪本拓人編『ようこそアフリカ世界へ（シリーズ地域研究のすすめ2）』（昭和堂、2022年）
- 12 Jonathan Fisher and Nina Wilén, *African Peacekeeping* (Cambridge University Press, 2022)

第3回

必読

「緊急対応ハンドブック」（第二版*）第I章第二節「保護」10-27頁
https://www.unhcr.org/jp/wp-content/uploads/sites/34/2017/10/1_38.pdf
English version: "Handbook for Emergency" (Third Edition): pp. 14-55
https://www.unhcr.org/web/archives_resources/files/Handbook_for_emergencies_3rd_edition.pdf
*日本語は第二版、英語は第三版

参考

- 1 グローバルトレンドズ2023/Global Trends 2023

概要/Overview

和文 <https://www.unhcr.org/jp/global-trends-2023>

English <https://www.unhcr.org/about-unhcr/who-we-are/figures-glance>

全文/Full Texts

English only <https://www.unhcr.org/global-trends-report-2023>

- 2 UNHCR Data Portal <https://data.unhcr.org/>

第4回

必読

- 1 東大作『内戦と和平—現代戦争をどう終わらせるか』（中公新書、2020年）
- 2 東大作『ウクライナ戦争をどう終わらせるか—「和平調停」の限界と可能性』（岩波新書、2023年）
- 3 東大作「ウクライナ戦争終結への課題と日本の役割」『外交』（2023年6月）
- 4 「オピニオン&フォーラム 終わらぬガザの戦闘」朝日新聞（2024年10月8日）
- 5 「UNFILを攻撃するイスラエルの国連嫌悪 PKOの役割と可能性」朝日新聞デジタル（2024年10月25日）
- 6 「“憎しみの連鎖”を止めるには 元国連政務官が語る日本の役割」NHK（2024年1月25日）
<https://www.nhk.jp/p/ohayou/ts/QLP4RZ8ZY3/blog/bl/pzvi7wDPqn/bp/panbLjrWda/>
- 7 「『自立と安定』支援 日本の味方増やし国守る力に」共同通信（2023年8月17日）<https://daisaku-higashi.com/m20230817/>
- 8 「そこが聞きたい 対グローバルサウス」毎日新聞（2023年7月4日）<https://daisaku-higashi.com/m20230704/>

参考

- 1 Daisaku Higashi, *Inclusivity in Mediation and Peacebuilding: UN, Neighboring States, and Global Powers* (Edward Elgar, 2022)
- 2 Miranda Booth, “Book Review: Inclusivity in Mediation and Peacebuilding,” *International Peacekeeping* (April 2024)
- 3 Ahmet Serdar Günaydin, “Book Review: Inclusivity in Mediation and Peacebuilding,” *Hague Journal of Diplomacy*, vol. 18 (2023)
- 4 Genevieve A. Chornenki, “Book Review: Inclusivity in Mediation and Peacebuilding,” *Canadian Arbitration and Mediation Journal*, vol. 32, no. 1 (2023)
- 5 Daisaku Higashi, *Challenges of Constructing Legitimacy in Peacebuilding: Afghanistan, Iraq, Sierra Leone, and East Timor* (Routledge, 2015)
- 6 東大作『我々はなぜ戦争したのか—米国・ベトナム敵との対話』（平凡社ライブラリー、2010年）

第5回

必読

- 1 長有紀枝編『スレブレニツァ・ジェノサイド—25年目の教訓と課題』（東信堂、2020年）198-241頁
- 2 長有紀枝『入門 人間の安全保障—恐怖と欠乏からの自由を求めて 増補版』（中央公論新社2021年）
- 3 長有紀枝「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争にみる『争いを終わらせない方法』から学ぶ『争いの終わらせ方』」『季刊民族学』第186号（2023年10月）

参考

- 1 長有紀枝編『スレブレニツァ・ジェノサイド—25年目の教訓と課題』（東信堂、2020年）
- 2 「さらなる難民危機と国際社会」『国際問題』No.709（2022年10月）37-49頁
https://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai_archive/2020/2022-10_005.pdf
- 3 長有紀枝「ボスニア移民・難民と国際的ロビー活動—スレブレニツァ事件のジェノサイド認定をめぐる—」黒木英充編『移民・難民のコネクティビティ』（東京大学出版会、2024年）259-281頁
- 4 長有紀枝「難民危機で試される人間の安全保障」『中央公論』2022年8月号、78-85頁
- 5 長有紀枝「人道危機からみるウクライナ情勢」『世界』No.959（2022年7月号）190-198頁
- 6 国連総会決議A/RES/46/182
<http://www.un.org/documents/ga/res/46/a46r182.htm>
- 7 UNHCR “Global Trends Forced Displacement in 2021”
<https://www.unhcr.org/publications/brochures/62a9d1494/global-trends-report-2021.html>
- 8 「国際赤十字とNGOの行動規範」（The Code of Conduct for the International Red Cross and Red Crescent Movement and Non-Governmental Organizations (NGOs) in Disaster Relief)
<http://www.ifrc.org/Global/Publications/disasters/code-of-conduct/code-english.pdf>
- 9 Mary Anderson, *Do No Harm: How Aid Can Support Peace-Or War* (Lynne Rienner Publishers, 1999)
邦訳『諸刃の援助』（明石書店、2006年）
- 10 長有紀枝「人道支援における『独立』概念をめぐる一考察」日本赤十字国際人道研究センター『人道研究ジャーナルVol.6』（東信堂、2017年）40-54頁
<https://osayukie.com/webbook/booklet1>

第6回

必読

上杉勇司、藤重博美編著『国際平和協力入門—国際社会への貢献と日本の課題』（ミネルヴァ書房、2018年）21-39、42-62頁

参考

1 Alex J. Bellamy and Paul D. Williams, *Understanding Peacekeeping*, 2nd ed. (Polity, 2010), pp.71-152
2 山下光「人道的介入と平和維持活動—軍事力の新たな役割」石津朋之、永末聡、塚本勝也編著『戦略原論—軍事と平和のグランド・ストラテジー』（日本経済新聞社、2010年）386-418頁

3 James Sloan, "The Evolution of the Use of Force in UN Peacekeeping," *The Journal of Strategic Studies*, vol.37, no.5 (2014)

第7回

必読

上杉勇司、藤重博美、吉崎知典編『平和構築における治安部門改革』（国際書院、2012年）序論（15-21頁）、第1章（25-36頁）、第2章（37-47頁）

参考

1 Stephen Watts et al., "Reforming Security Sector Assistance for Africa," RAND Corporation, 2018, https://www.rand.org/pubs/research_briefs/RB10028.html

2 Kristen A. Harkness, "Security Assistance in Africa: The Case for More," *Parameters*, vol.45, no.2 (2015): pp.13-24

3 Stephen Biddle, "Building Security Forces & Stabilizing Nations: The Problem of Agency," *Daedalus*, vol.146, no.4 (2017): pp.126-138

4 Jesse Dillon Savage and Johathan D Caverley, "When Human Capital Threatens the Capitol: Foreign Aid in the Form of Military Training and Coups," *Journal of Peace Research*, vol. 54, no. 4 (2017)

5 UNDP, "Soldiers and Citizens: Military Coups and the Need for Democratic Renewal in Africa," 2023

第8回

必読 なし

参考

Barbara F. Walter, Lise Morje Howard, and V. Page Fortna, "The Extraordinary Relationship between Peacekeeping and Peace," *British Journal of Political Science*, vol.51, no.4 (2021)

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1022J
授業名	軍備管理・軍縮・不拡散
担当者	TSUKAMOTO Katsuya／塚本 勝也
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

昨今の安全保障問題を理解するために必要な軍備管理・軍縮・不拡散の現状を理解するとともに、その課題を考察する。

[到達目標]

本講義において履修者が獲得すべき知識や能力は以下のとおりである。

- ①核兵器、化学兵器、生物兵器、通常兵器のそれぞれの特性について理解し、それらに対する規制や軍備管理に関する知識を持ちそれを説明できる能力
- ②上記の知識に基づき、各種の問題を分析的・批判的に理解する能力
- ③軍備管理・軍縮・不拡散の政策課題について政策の在り方を提案する能力

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 軍備管理・軍縮・不拡散と安全保障
- 第2回 核戦略理論
- 第3回 核兵器の不拡散
- 第4回 ミサイルの拡散問題
- 第5回 化学兵器の禁止
- 第6回 生物兵器の禁止
- 第7回 通常兵器の制限と削減
- 第8回 まとめ

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

成績は、①授業への貢献度（30％）②まとめの際のプレゼンテーション（70％）によって決定する。プレゼンテーションについては、①論理性、②エビデンス、③表現力、④政策的インプリケーションの4つを特に重視して評価する。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読

- 1 納家政嗣「安全保障と軍備管理」浅田正彦・戸崎洋史編『核軍縮不拡散の法と政治』（信山社、2008年）
- 2 納家政嗣「大量破壊兵器不拡散の思想と展開」納家政嗣・梅本哲也編『大量破壊兵器不拡散の国際政治学』（有信堂、2000年）

参考

石川卓「北東アジアにおける「戦略的安定性」と日米の抑止態勢」『海外事情』、第61巻5号、（2013年5月）、36-48頁。

第2回

必読

- 1 梅本哲也『核兵器と国際政治——1945－1995』（日本国際問題研究所、1996年）
- 2 秋山信将、高橋杉雄編『「核の忘却」の終わり 核兵器復権の時代』（勁草書房、2019年）

参考

- 1 スコット・セーガン、ケネス・ウォルツ（川上高司監訳、斎藤剛訳）『核兵器の拡散 終わりのなき論争』（勁草書房、2017年）
- 2 ブラッド・ロバーツ（村野将監訳）『正しい核戦略とは何か 冷戦後アメリカの模索』（勁草書房、2022年）
- 3 ジョセフ・S・ナイ・Jr.（土山実男訳）『核戦略と倫理』（同文館出版、1988年）

第3回

必読

阿部達也「核兵器の規制と核保有国の『自国第一主義』」『論究ジュリスト』30号（2019年8月）59-66頁

参考

- 1 浅田正彦「NPT体制の動揺と国際法」浅田正彦・戸崎洋史編『核軍縮不拡散の法と政治』（信山社、2008年）3-40頁
- 2 秋山信将・菊地昌廣・浅田正彦・宮本直樹「第2章 核兵器の不拡散」黒澤満編『軍縮問題入門』第4版（東信堂、2012年）47-83頁
- 3 William H. Boothby and Wolff Heintschel von Heinegg, Nuclear Weapons Law (Cambridge University Press, 2021), pp. 197-213

第4回

必読

高橋杉雄「ポストINF時代の抑止戦略」高橋杉雄・森本敏編著『新たなミサイル軍拡競争と日本の防衛』（並木書房、2021年）

参考

高橋杉雄「日本：世界で最も厳しい安全保障環境下での核抑止」高橋杉雄・秋山信将編『「核の忘却」の終わり』（勁草書房、2019年）

第5回

必読

- 1 浅田正彦「第10章 化学兵器禁止体制の現状と課題」山本武彦・庄司真理子編『軍縮・軍備管理』（志學社、2017年）
- 2 浅田正彦『化学兵器の使用と国際法—シリアをめぐる—』（東信堂、2022年）

参考

外務省軍縮不拡散・科学部編集「第6部 化学・生物兵器」『日本の軍縮・不拡散外交』第7版（2016年）

第6回

必読

杉島正秋「生物兵器の禁止」黒沢満 編著『軍縮問題入門』第4版（東信堂、2012年）

参考

- 1 杉島正秋「生物兵器軍縮と健康安全保障」『朝日大学法学創立30周年記念論文集』（2018年3月）
- 2 外務省軍縮不拡散・科学部編集「第6部 化学・生物兵器」『日本の軍縮・不拡散外交』第7版（2016年）

第7回

必読

- 1 佐藤丙午、佐渡紀子、足立研幾、阿部達也「通常兵器の規制と禁止」黒沢満編著『軍縮問題入門』第4版（東信堂、2012年）
- 2 岩本誠吾「特定通常兵器使用禁止制限条約（CCW）の成立過程」榎本珠良編著『禁忌の兵器』（日本経済評論社、2020年）
- 3 岩本誠吾「ロボット兵器と国際法」弥生真生・穴戸常寿編『ロボット・AIと法』（有斐閣、2018年）
- 4 岩本誠吾「自立型致死兵器システム（LAW S）規制の国際法政策論－倫理規範から法規範へ、人道法から軍縮法へ－」防衛法学会編『防衛法研究』第46号（2022年）
- 5 岩本誠吾「害的手段（兵器）の法規制－使える兵器と使えない兵器の区別はあるのか」日本赤十字国際引導研究センター『人道研究ジャーナル』第12号（2023年）
- 6 岩本誠吾「軍用ドローンは「忠実なる僚機」か「貧者の空軍」か」新潮社 Foresight（2022年）
- 7 日本軍縮学会『軍縮研究：Disarmament Review』Vol.11, No1（2022年）
- 8 岩本誠吾「人口密集地における爆発性兵器（EWIPA）の使用規制－国際人道法との関係性－」『産大法学』57巻3・4号（2024年）

参考

- 1 外務省軍縮不拡散・科学部編集「第7部 通常兵器」『日本の軍縮・不拡散外交』第7版（2016年）
- 2 笹川平和財団新領域研究会編『新領域安全保障』（ウェッジブックス、2024年）

第8回

必読／参考 研修員のニーズに応じて決定。

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP1023J
授業名	地域安全保障 1（欧州、ロシア）
担当者	YAMAZOE Hiroshi／山添 博史
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

【本授業の概要】

欧州、ロシア・旧ソ連を中心としたユーラシア地域の戦略環境の特徴を理解し、国際安全保障や東アジアの戦略環境に与える影響について考察する。

【到達目標】

日本に深いかわりがありながら日常的に理解する機会に乏しい旧ソ連地域や欧州全体について、具体的な事情や論理を理解し説明できるようにする。

【関連するディプロマ・ポリシー】

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 ユーラシアの戦略環境

第2回 欧州の安全保障

第3回 ロシア・ウクライナ戦争への道

第4回 ユーラシアの経済とエネルギー

第5回 ロシアの政治

第6回 ロシアの外交・安全保障

第7回 ロシアの軍事・国防政策

第8回 まとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

レポート試験1回（100%、全授業時間終了後）

【成績評価基準】

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

第1回

必読

宇山智彦「ウクライナ侵攻は中央アジアとロシアの関係をどう変えるか」池内恵他『ウクライナ戦争と世界のゆくえ』（東京大学出版会、2022年8月）

参考

1 山添博史「中央アジア・ロシアから見た中国の影響力拡大——ユーラシア空間における協力と自律性の追求」増田雅之編著『中国安全保障レポート2020：ユーラシアに向かう中国』（防衛研究所、2019年11月）Chap 2 in NIDS China Security Report 2020.

2 Nadège Rolland, "A China-Russia Condominium over Eurasia," *Survival*, Vol.61 No.1, February-March 2019, pp.7-22.

第2回

必読

1 田中亮佑「危機管理と能力向上におけるEU・英国関係——ブレグジット後の欧州の『戦略的自律』の行方」『安全保障戦略研究』（防衛研究所、2020年8月）、83-100頁

2 田中亮佑「NATOの改革からみるバルト海地域防衛の変化——2014年と2022年を契機として」（防衛研究所、2023年3月）、143-161頁

参考

1 山本健『ヨーロッパ冷戦史』（ちくま書房、2021年）

2 広瀬佳一編著『現代ヨーロッパの安全保障——ポスト2014：パワーバランスの構図を読む』（ミネルヴァ書房、2019年）

3 臼井陽一郎、中村英俊『EUの世界戦略と「リベラル国際秩序」のゆくえ』（明石書店、2023年）

4 鶴岡路人『欧州戦争としてのウクライナ侵攻』（新潮選書、2023年）

第3回

必読

1 合六強「ウクライナ危機——冷戦後ヨーロッパ安全保障の分岐点」岩間陽子等編『ハンドブックヨーロッパ外交』（ミネルヴァ、書房、2022年）。

2 合六強「長期化するウクライナ危機と米欧の対応」『国際安全保障』48-3, 2020年12月。

参考

1 合六強「NATOとウクライナ」『戦禍のヨーロッパ：日欧関係はどうあるべきか』研究レポート、日本国際問題研究所（2023年3月）https://www.jiia.or.jp/pdf/research/R04_Europe/01-02.pdf

2 鶴岡路人「抑止と同盟から考えるロシア・ウクライナ戦争」研究レポート、日本国際問題研究所（2022年3月）<https://www.jiia.or.jp/research-report/europe-fy2021-08.html>

3 合六強「ウクライナ侵攻から1年」『三田評論』（2023年3月）https://www.mita-hyeron.keio.ac.jp/speaking-hall/202303-1_1_2.html

第4回

必読

一ノ渡忠之「『緩やかな回復を続ける2023年のロシア経済』～中長期的な低成長は不可避～」『石油・天然ガスレビュー』Vol. 57, No. 4, 41-64頁。https://oilgas-info.jogmec.go.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/850/202307_2a.pdf

参考

1 Jeffrey J. Schott, Economic Sanctions against Russia: How Effective? How Durable? Policy Brief, 23-3, PIIE, 2023.
<https://www.piie.com/sites/default/files/2023-04/pb23-3.pdf>

2 Tomas Malmlöf, Russia's Defence Industry at War: Can It Live up to Expectations? RUFBS Briefing, No. 53, FOI, 2023.
<https://www.foi.se/en/foi/reports/report-summary.html?reportNo=FOI%20Memo%208231>

3 Emil Wannheden, Russia's Wartime Economy: Neither Boom nor Bust, RUFBS Briefing, No. 54, FOI,

2023.

<https://www.foi.se/en/foi/reports/report-summary.html?reportNo=FOI%20Memo%208236>

第5回

必読

1 油本真理・溝口修平編『現代ロシア政治』（法律文化社、2023年）第3章

参考

- 1 「ロシア：ポスト・プーチン問題と1993年憲法体制の変容」防衛研究所編『東アジア戦略概観2021』
- 2 「ロシア：新たな『国家安全保障戦略』と準軍事組織の発展」防衛研究所編『東アジア戦略概観2022』
- 3 油本真理・溝口修平編『現代ロシア政治』（法律文化社、2023年）
- 4 横手慎二編著『ロシアの政治と外交』（放送大学教育振興会、2015年3月）、第1章及び第2章。
- 5 塩川伸明・池田嘉郎編著『社会人のための現代ロシア講義』（東京大学出版会、2016年）、第1講。

第6回

必読

兵頭慎治「ウクライナ戦争の行方とロシアの将来」日本国際政治学会報告ペーパー（日本国際政治学会、2023年11月）

参考

- 1 兵頭慎治「ロシアによるウクライナ侵攻と中露戦略的連携の行方」『治安フォーラム』（立花書房、2022年9月号）40～48頁
- 2 アレクサンダー・ガブエフ「中ロ関係の真実-水面下で進む包括的パートナーシップ」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』（フォーリン・アフェアーズ・ジャパン、2023年第6号）、98～103頁

第7回

必読

- 1 小泉悠『現代ロシアの軍事戦略』（筑摩書房、2021年5月）第2章
- 2 小泉悠『ウクライナ戦争』（筑摩書房、2022年12月）第3章
- 3 Timothy Thomas, "The Evolving Nature of Russia's Way of War," MILITARY REVIEW, July/August 2017.
- 4 Tor Bukkvoll, "Iron Cannot Fight – The Role of Technology in Current Russian Military Theory," Journal of Strategic Studies, Vol. 34, No. 5 (2011).

参考

- 1 小泉悠『「帝国」ロシアの地政学』（東京堂出版、2019年）
- 2 Ofer Fridman, Russian 'Hybrid Warfare': Resurgence and Politicisation(London: C. Hurst & Co. Ltd., 2018).
- 3 Bob Seely, "A Definition of Contemporary Russian Conflict: How Does the Kremlin Wage the War?" Russia and Eurasia Studies Centre Research Paper, No. 15 (2018).
- 4 Michael Kofman, Anya Fink, Jeffrey Edmonds, Russian Strategy for Escalation Management: Evolution of Key Concepts (Washington D.C.: CNA Corporation, 2020).

第8回

必読

山添博史「ウクライナをめぐるロシアの強要戦術」NIDSコメンタリー（2022年2月）

参考

- 1 フィオナ・ヒル、クリフォード・ガディ『プーチンの世界』（新潮社、2016年）
- 2 山添博史「ロシアの多層的な闘争手段」防衛研究所ブリーフィング・メモ（2020年10月）

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

特になし

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2108J
授業名	武力行使と国際法
担当者	EIFUKU Seiya／永福 誠也
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

武力行使に関する国際法上の要件及びジュネーブ諸条約、交戦法規、戦闘員資格、捕虜等の取扱い、戦争犯罪の処罰、中立法規などの武力紛争法に関する知識制度を高めるため、各種論点について、特に現在進行中のウクライナロシア間の武力紛争やガザにおける紛争に係る具体的事案を題材に分析検討を行う。

[到達目標]

本授業の到達目標は以下のとおりである。

- ・武力の行使に関する国際法上の原則、武力紛争法上の基本原則について説明できる。
- ・武力の行使及び武力紛争法に関する学術文献の内容を理解して説明できる。
- ・武力の行使に関する諸外国の政策指針、武力紛争法に関する諸外国軍隊のマニュアル・資料等を確認し、その特徴及び適否等について分析評価できる。
- ・武力の行使及び武力紛争に係る国際社会の具体的事案に関し、国際法上の論点を抽出し、分析評価とその説明ができる。
- ・我が国の武力の行使に係る各種政策指針、武力の行使（戦闘）に係る実務上の指針に関し、国際法を踏まえ、適切な起案ができる。
- ・武力の行使（戦闘）に係る実務上の教育の要領及び資料作成並びに内部規則の起案に関し、国際法を踏まえた内容になるよう指導、評価ができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 オリエンテーション・導入講義

第2回 報告・討議：自衛権に基づく武力の行使

第3回 報告・討議：安保理の授權等に基づく武力の行使

第4回 報告・討議：戦闘方法・兵器の規制

第5回 報告・討議：戦闘員資格・捕虜等の取り扱い

第6回 報告・討議：海上戦・海上捕獲権、戦争犯罪の処罰

第7回 報告・討議：中立法規

第8回 まとめ：総括討議

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

授業への貢献度（50％）、プレゼンテーション（50％）

・授業への貢献度は、各回次の報告者への質問及び報告者からの回答に対する評価・コメント、当該回次のテーマに関する細部論点提起と自らの意見提示、他の参加者の意見提示に関する評価・コメント等により評価する。

・プレゼンテーション（報告）は、各回次のテーマに係る指定文献について報告担当者として①作成したレジюмеの内容、②当該レジюмеに基づく報告、③報告内容に対する質問への応答について評価する。報告レジюмеに含めるべき内容は次のとおり：1）問題の所在、2）当該問題の分析検討、3）分析検討を踏まえた文献筆者の結論、4）当該結論に対する自らの評価及び問題に対する（又は問題解決に関する）自らの意見。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：（4-1:必携のテキスト 4-2:その他）

4-1:必携のテキスト

国際条約集（有斐閣）

4-2:その他

報告者（受講者）の要望があれば、当該要望に適う文献を取り上げる。なお、基本テキスト（参考文献）は以下のとおり。

- 1 石井友梨佳「ロシア＝ウクライナ戦争における穀物黒海イニシアティブの意義」『国際法研究』第13号（2024年3月）76-99頁。
- 2 浅田正彦・玉田大編著『ウクライナ戦争と国際法』（東信堂、2023年）5-65頁。
- 3 吉川元偉「ロシアのウクライナ侵略への国際連合の対応」『国際法研究』第11号（2023年3月）6-25頁。
- 4 黒崎将広「ウクライナIT軍と戦闘員資格」『国際法研究』第11号（2023年3月）78-94頁。
- 5 永福誠也「外国人軍隊構成員の戦闘員資格」『NIDSコメンタリー』第234号（2022年8月）。
- 6 村瀬信也編『自衛権の現代的展開』（東信堂、2007年）。
- 7 森肇志『自衛権の基層（増補新装版）』（東京大学出版会、2023年）。
- 8 田岡良一『国際法上の自衛権（補訂版）』（勁草書房、1981年）。
- 9 松井芳朗『武力行使禁止原則の歴史と現状』（日本評論社、2018年）。
- 10 永福誠也「機雷の開発と使用に必要な考慮」『安全保障戦略研究』第1巻第1号（2020年8月）119-139頁。
- 11 永福誠也「偽情報と武力紛争違法」『安全保障戦略研究』第5巻第1号（2024年12月）78-97頁。
- 12 中谷和弘他『サイバー攻撃の国際法（増補版）』（信山社、2023年）。
- 13 村瀬信也・真山全編『武力紛争の国際法』（東信堂、2004年）。
- 14 竹本正幸監訳『海上武力紛争法—サンレモ・マニュアル』（東信堂、1997年）。
- 15 岩本誠吾「自律型致死兵器システム規制議論の動向と今後の展望：2023年度」『産大法学』58巻2号（2024年7月）101-168頁。
- 16 尾崎久仁子『国際刑事裁判所』（東信堂、2022年）。
- 17 村瀬信也・洪恵子共編『国際刑事裁判所（第三版）』（東信堂、2024年）。
- 18 永福誠也「国際刑事裁判所規程中の処罰に関する特則」『防衛法研究』第48号（2024年10月）78-97頁。
- 19 川岸伸「ウクライナ紛争における第3国援助による軍事援助：中立法をめぐる」『人道研究ジャーナル』12巻（2023年2月）167-179頁。
- 20 Deter Fleck (eds.), *The Handbook of International Humanitarian Law* (4th ed.), Oxford University Press, 2021.
- 21 Emily Crawford and Alison Pert, *International Humanitarian Law* (3rd ed.), Cambridge University Press, 2024.
- 22 Christine Gray, *International Law and the Use of Force* (4th ed.), Oxford University Press, 2018.

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

受講者は各自1回報告を実施

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2111J
授業名	日本軍事史
担当者	TACHIKAWA Kyoichi／立川 京一
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

第二次世界大戦までの日本の軍事に係る諸事象に関する考察を通じて、その傾向、特徴等を探求しつつ、安全保障及び防衛について理解を深める。

[到達目標]

学んだ知識を安全保障・防衛政策に結びつけてできる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

2. 各授業のテーマ：

第1回 オリエンテーション

第2回 発表準備

第3回 発表者が関心を有する日本の軍事史に関する事象について発表・討議を行う。

第4回 発表者が関心を有する日本の軍事史に関する事象について発表・討議を行う。

第5回 発表者が関心を有する日本の軍事史に関する事象について発表・討議を行う。

第6回 発表者が関心を有する日本の軍事史に関する事象について発表・討議を行う。

第7回 発表者が関心を有する日本の軍事史に関する事象について発表・討議を行う。

第8回 発表者が関心を有する日本の軍事史に関する事象について発表・討議を行う。

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

初回授業で履修者と相談して割り振る口頭発表（70％）、討議への貢献（30％）

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：（4-1:必携のテキスト 4-2:その他）

4-2:その他

テキストは定めない。参考文献（一部）は次の通り。

- 1 高橋典幸・山田邦明・保谷徹・一ノ瀬俊也『日本軍事史』（吉川弘文館、2006年）
- 2 「戦争の日本史」全23巻（吉川弘文館、2006～2009年）
- 3 国立歴史民族博物館監修「民族にとって戦いとは」シリーズ全5巻（東洋書林、1999～2002年）
- 4 『軍事史学』『日本歴史』『史学雑誌』等の学術誌掲載論文等

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は日本語

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2112J
授業名	国際政治学概論
担当者	TSUKAMOTO Katsuya／塚本 勝也
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II) through Spring(Session I) 秋後～春前
単位数	2

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

国際政治学の主要理論について基礎的な素養を身に付けることを目的とする。セミナーで取り上げる内容については受講者の希望・関心に応じる。

[到達目標]

本講義において履修者が獲得すべき知識や能力は以下の通りである。

- ①国際政治学の主要理論であるリアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムの基本的前提と分析視点に関する知識
- ②上記の知識に基づき、安全保障問題を分析的に理解し説明する能力
- ③安全保障上の政策課題について、理論的な観点から政策のあり方を提案する能力

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

2. 各授業のテーマ：

（1）前段

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 事例研究（1）リアリズム
- 第3回 事例研究（2）ネオリアリズム
- 第4回 事例研究（3）リベラリズム
- 第5回 小括
- 第6回 事例研究（4）コンストラクティビズム
- 第7回 事例研究（5）ネオコン
- 第8回 まとめ

（2）後段

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 事例研究（1）リアリズム
- 第3回 事例研究（2）ネオリアリズム
- 第4回 事例研究（3）リベラリズム
- 第5回 小括
- 第6回 事例研究（4）コンストラクティビズム
- 第7回 事例研究（5）ネオコン
- 第8回 まとめ

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

成績は、①プレゼンテーション（60%）、③授業への参加度（40%）によって決定する。特にプレゼンテーションについては、①適切な事例の選択、②理論の適用方法、③理論から導き出された政策提言の3つを重視して評価する。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している

D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している

E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：（4-1:必携のテキスト 4-2:その他）

基本的なテキストとしてジョセフ・S・ナイ・ジュニア、デイヴィッド・A・ウェルチ『国際紛争——理論と歴史 原書第10版』（有斐閣、2017年）〔英語版は、*Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History*, 10th ed.〕を用いるが、それ以外のテキスト・参考文献については受講者の希望・関心に応じて後日指定する。

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は日本語および英語とする。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2113J
授業名	民間軍事会社の現状と課題
担当者	ONO Keishi／小野 圭司
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

民間軍事会社を題材として、経済学的な視点で安全保障問題を広く考察する。また、傭兵・民間軍事会社の歴史的変遷を通して、社会と軍隊の関わりを考える。

なお部外講師の協力も得て、「民間企業の危機管理」「行政民営化の戦略」についても理解を深めることも視野に入れる。

[到達目標]

- ・ミクロ経済学という公共財・私的財としての軍事・安全保障の理解を深め、説明できる
- ・軍事・安全保障に対する社会的・歴史的視野を涵養し、それを利用して議論できる

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

- ①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力
- ⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 講義：民間企業による軍事力提供の意味【傭兵・義勇兵・外人部隊などとの違い】

第2回 報告：民間軍事会社の歴史……【傭兵から民間軍事会社へ】

第3回 報告：民間軍事会社の現状……【民間軍事会社から危機管理の総合商社へ】

第4回 講義：危機管理サービス会社による講義（部外講師：Int'l SOS社を予定）

第5回 報告：海賊対処と民間軍事会社【陸とは違う生い立ちと活動】

第6回 報告：ロシアの民間軍事会社…【傭兵への回帰の傾向】

第7回 講義：行政の民営化戦略……（部外講師：中央大学・磯村和人教授を予定）

第8回 報告：民間軍事会社の今後……【軍務を民営化するべきか】

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

担当報告の内容（50％）、授業での討議内容（50％）

履修者が決まり次第、セミナー長は発表・討論・議事進行の時期割り振りについて、担当教官の指示を仰ぐこと。時期割り振りについては、履修者間の協議によるものとする。

[成績評価基準]

A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している

B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している

C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

教科書

P.W.シガー『戦争請負会社』（NHK出版、2004年）

マート・ガビドゥリッ『ワグネル プチーン秘密軍隊』（東京堂出版、2023年）

アル・J・フェンター『世界の傭兵最前線』（原書房、2016年）

Annual Report of G4S (2024)

4-2:その他

参考文献

京大西洋史研究室編『傭兵制度の歴史的研究』（比叡書房、1955年）

菊池良夫『傭兵の二千年史』（講談社現代文庫、2002年）

ラインハルト・バウマン『ドイツ傭兵の文化史』（菊池良生訳）（新評論、2002年）

グリーンメルスハウゼン『阿呆物語』（望月市恵訳）（岩波文庫、1954年）

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

可

7. 履修上の注意：

原則日本語で実施するが、英語での発表・議論参加は可とする。

進捗に鑑みながら、英文テキストも併用する。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2117J
授業名	イスラーム主義とテロリズム
担当者	NISHINO Masami／西野 正巳
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II) through Spring(Session I) 秋後～春前
単位数	2

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

2001年の9・11同時多発テロ、そして2014年の「イスラーム国」の勢力伸長とその後のテロの続発が示すように、イスラーム主義（いわゆるイスラーム原理主義）とそのテロリズムは、今も安全保障上の深刻な脅威である。2023年にはハマスによる対イスラエル大規模攻撃も発生した。グローバル化が進展した今日、日本もこの問題と無縁ではない。本セミナーは、イスラーム主義とテロリズムについて、理解を深めることを目指す。

[到達目標]

本授業の到達目標は以下のとおりである。

- ・イスラーム主義を知る上で、その前提として必要な、イスラーム教についての基本的な知識を得てそれについて説明できる。
- ・イスラーム主義がどのような思想・イデオロギーであるかについて、基本的な知識を得てそれについて説明できる。
- ・イスラーム主義の理念を掲げたテロリズムについて、詳しい知識を得た上で、それについて発表や議論を行うことができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

（1）前段

第1回 打ち合わせ、概要説明

第2回 講義（イスラーム教、及び、イスラーム主義）

第3回 発表準備（テーマ：1960年代におけるイスラーム主義過激派思想の確立）

第4回 発表、討議（テーマ：1960年代におけるイスラーム主義過激派思想の確立）

第5回 発表準備（テーマ：1970年代以降のエジプトなどアラブ諸国におけるイスラーム主義過激派のテロとその類型）

第6回 発表、討議（テーマ：1970年代以降のエジプトなどアラブ諸国におけるイスラーム主義過激派のテロとその類型）

第7回 発表準備（テーマ：1990年代以降の「遠い敵」との戦い）

第8回 発表、討議（テーマ：1990年代以降の「遠い敵」との戦い）

※発表：担当部分について、発表する。

レポート：なし

（2）後段

第1回 発表準備（テーマ：2001年の9・11同時多発テロ）

第2回 発表、討議（テーマ：2001年の9・11同時多発テロ）

第3回 発表準備（テーマ：アルカーイダ、2010年代における「イスラーム国」の伸長）

第4回 発表、討議（テーマ：アルカーイダ）

第5回 発表、討議（テーマ：2010年代における「イスラーム国」の伸長）
第6回 発表準備（テーマ：イスラーム主義過激派のテロへの対処）
第7回 発表、討議（テーマ：イスラーム主義過激派のテロへの対処）
第8回 まとめ（それまでの学習内容全体について、質疑応答と総合討議を実施）
※発表：担当部分について、発表する。
レポート：なし

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

発表（60%）と討議（40%）に基づいて評価。

なお、発表のテーマと時期については、初回授業で履修者の興味関心を考慮して割振りする。

【成績評価基準】

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

必要に応じて、資料を配布

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は日本語

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2118J
授業名	戦後日本の安全保障政策と国際関係
担当者	NAKAJIMA Shingo／中島 信吾
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

中長期的な観点から防衛政策の立案に資するため、冷戦期における日本の安全保障政策の歴史的展開について考察する。

[到達目標]

現在、あるいは将来の防衛政策上の課題について、歴史的な知見に基づいた理解、洞察を可能とする視座を修得し、説明ができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

2. 各授業のテーマ：

第1回 オリエンテーション：セミナー全体の概要、意義、進め方、主要な資料等について講義を実施する。第3回以降は、履修生が選定した発表テーマに基づいて発表と討議を実施する。

第2回 発表準備：履修生の次回以降の資料探索、文献調査等発表準備を行うとともに、必要に応じて履修生に発表内容等について指導等を実施する。

第3回 発表・討議：防衛研究所や政策研究大学院大学が実施したオーラル・ヒストリーを主な題材とし、履修生による発表と討議を実施する。

第4回 発表・討議：防衛研究所や政策研究大学院大学が実施したオーラル・ヒストリーを主な題材とし、履修生による発表と討議を実施する。

第5回 発表準備：履修生の次回以降の資料探索、文献調査等発表準備を行うとともに、必要に応じて履修生に発表内容等について指導等を実施する。

第6回 発表・討議：防衛政策に関するオーラル・ヒストリー、4. に提示した参考文献等を元に、戦後防衛政策の主要な事象を題材に発表と討議を実施する。

第7回 発表・討議：防衛政策に関するオーラル・ヒストリー、4. に提示した参考文献等を元に、戦後防衛政策の主要な事象を題材に発表と討議を実施する。

第8回 発表・討議：防衛政策に関するオーラル・ヒストリー、4. に提示した参考文献等を元に、戦後防衛政策の主要な事象を題材に発表と討議を実施する。

【授業外学修】

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

プレゼンテーション2回（70％）、討議への貢献（30％）

プレゼンテーションの時期は初回授業後に割り振りを実施する。

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

- 1 防衛研究所、政策研究大学院大学等が実施しているオーラル・ヒストリー
- 2 五百旗頭真編『戦後日本外交史〔第3版補改訂〕』（有斐閣、2014年）

4-2:その他

- 3 真田尚剛『「大国日本」の防衛政策—防衛大綱に至る過程 1968～1976年』（吉田書店、2021年）
- 4 千々和泰明『安全保障と防衛力の戦後史 1971～2010 「基盤的防衛力構想」の時代』（千倉書房、2021年）
- 5 特集「『防衛計画の大綱』の多角的研究」『国際安全保障』第44巻第3号（2016年12月）
- 6 特集「日本の安全保障を記録する」『防衛学研究』第58号(2018年3月)
- 7 中島信吾『戦後日本の防衛政策——「吉田路線」をめぐる政治・外交・軍事』（慶應義塾大学出版会、2006年）
- 8 田中明彦『安全保障——戦後50年の模索』（読売新聞社、1997年）
- 9 吉田真吾『日米同盟の制度化——発展と深化の歴史過程』（名古屋大学出版会、2012年）

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

自ら発表するだけでなく、積極的に議論に参加していただきたい。

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2125J
授業名	現代中国の外交
担当者	IIDA Masafumi／飯田 将史
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

中国の外交・安全保障政策に関する背景・現状分析の方法論について学習する。

[到達目標]

中国の外交・安全保障政策について幅広い視点から考察することができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP⑤国際社会の動きを理解し、異なる価値観や制度に柔軟に対応しつつ、バランスをもったリーダーとして活躍できる能力

2. 各授業のテーマ：

- 第1回 オリエンテーション・導入講義
- 第2回 テキスト第1章・第2章の発表・討議
- 第3回 テキスト第3章・第4章の発表・討議
- 第4回 テキスト第5章・第6章の発表・討議
- 第5回 テキスト第7章・第8章の発表・討議
- 第6回 テキスト第9章・第10章の発表・討議
- 第7回 テキスト第11章・第12章の発表・討議
- 第8回 第7回までの発表・討議を踏まえた総合討議

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

発表・討議への貢献度を50%、第8回終了時に課すレポートを50%の割合で評価する。

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：（4-1:必携のテキスト 4-2:その他）

4-1:必携のテキスト

加茂具樹編『中国は「力」をどう使うのか』一藝社、2023年

4-2:その他

『中国安全保障レポート』各年版

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は日本語

戻る

開講年度（4月-3月）	2025
科目番号	SSP2141J
授業名	軍事組織の社会学的考察
担当者	OOI Kazunao／大井 一史
メールアドレス	
学期／曜日／時限	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
単位数	1

1. 本授業の概要及び到達目標：

[本授業の概要]

軍事組織の社会的な調査・研究の例に触れ、その方法論や含意について考察することで、軍事社会学の理論に係る知見を得るとともに、科学的思考力の涵養に資する。

[到達目標]

- ①軍事社会学の特殊性やその調査・研究に係る基礎的概念の概要を理解し、文献読解に生かすことができる。
- ②軍事社会学の研究手法や研究成果に係る文献を精読し、その要旨と自身の評価（所感）を資料にまとめ、発表・議論することができる。

[関連するディプロマ・ポリシー]

戦略研究プログラム

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

2. 各授業のテーマ：

第1回 オリエンテーション・軍事社会学基礎講義

オリエンテーション：セミナーの進め方の説明、必携のテキストの内容紹介

軍事社会学基礎講義：調査研究における基礎的概念と留意事項、ケーススタディ

第2回 統計解析基礎講義

統計解析における基礎的概念、SPSSによる解析作業デモ

第3回 必読文献読解・論文選定・発表準備

発表を担当する文献を選定、読解、発表準備を行う。

第4回～第7回 発表・議論

第8回 まとめ

発表対象論文のテーマ（一例）

- 軍隊の民主的統制
- 人民による軍隊への信頼
- 軍隊の組織文化
- 新たな任務に対する軍事の倫理 等々

[授業外学修]

事前に教科書/配布資料/関連する資料等を読んでおくこと。授業後は授業で理解したことを次の授業につなげられるよう、各個人でまとめておくこと。

3. 成績の評価方法：

担当分の発表・議論（第4回～第7回）の内容（作成資料等含む）（80%）、担当分以外の議論への貢献（20%）

[成績評価基準]

- A 90-100 合格 到達目標を高い水準で達成している
- B 80-89 合格 到達目標を満足できる水準で達成している
- C 70-79 合格 到達目標を概ね達成している
- D 60-69 合格 到達目標を最低限の水準で達成している
- E 0-59 不合格 到達目標を達成していない

4. テキスト、参考文献等：(4-1:必携のテキスト 4-2:その他)

4-1:必携のテキスト

Giuseppe Caforio and Marina Nuciari eds, *Handbook of the Sociology of the Military 2nd ed*, 2018, Springer International Publishing; Joseph Soeters, Patricia M. Shields and Sebastiaan Rietjens eds, *Routledge Handbook of Research Methods in Military Studies*, 2014, Routledgeを教育資料として貸出する。その他、必要に応じて資料を配布する。

4-2:その他

Armed Forces & Society, SAGE Publications (研究図書室所蔵)

5. 授業で使用するソフトウェアについて：

IBM SPSS Statistics バージョン30.0.0.0 (デモのため教官のみ使用、入手済)

6. 聴講の可否：

否

7. 履修上の注意：

使用言語は、日本語（発表対象論文は主に英語、日本語論文の選択も可）。

戻る

Academic Year (April - March of the next year)	2025
Course Number	SSP2146E
Course Name	The Post-War History of Japanese Security
Instructor	ISHIHARA Yusuke／石原 雄介
Email Address	
Term／Day／Period	Fall (Session II), Winter 秋後、冬
Credits	1

1. Course Description and the Learning Objectives :

[Course Description]

Each week, the seminar convener delivers an an-hour introductory lecture on topics as outlined below. Students are expected to participate actively in an-hour discussions following the lecture. The seminar purpose is to learn about the basics of the post-war history of Japanese security affairs, become able to investigate contemporary security issues in long-term historical perspectives and build skills to participate in academic discussions in English.

[Course Goals]

1. Students will learn to critically evaluate conceptual tools with which to analyse the complex empirical materials in a cohesive and organised way.
2. They will also be equipped with long historical perspective from which the contemporary security issues can be understood in greater depth.
3. For those who are not native English speakers, this seminar also offers an opportunity to learn about Japan's history in English and interact with other international students, and vice versa.

[Related Diploma Policy (DP)]

Strategic Studies Program

DP①安全保障・防衛問題を理解するための知識と分析能力

DP②学んだ知識を政策に結びつけられる能力

DP③政府関係等の対応や関係諸国との調整、各種法制の適用などを踏まえつつ、政策を実現させる実践力

2. Course Outline :

Week1 -Introduction

-The Reverse Course, the Yalta System, and the Cold War (1940s-50s)

Week2 -The Yoshida Doctrine and Japan's Return to International Society (1940s-50s)

Week3 -The Hub and Spokes system (1950s-60s)

Week4 -Nuclear nonproliferation and nuclear umbrella (1960s-1970s)

Week5 -The Sino-U.S. Rapprochement and the Sino-Japanese Normalisation (1960s-70s)

Week6 -ASEAN and regional security architecture (1970s and 90s)

Week7 -The U.S.: a liberal leviathan or a unipolar dominance? (90s)Week8 -Wrap up

[Out-of-course Learning]

Read the textbook/handouts/related materials in advance. After the lectures, students should summarize what he/she has learned and apply it to the next lecture.

3. Grading :

contributions and performance (100%) : the course convener will evaluate the effectiveness of students' role as a kick-off discussant in in-class discussions.

[Evaluation Criteria]

Student's achievement of the Course Goals is:

- A: Achieved the goal at a high level
- B: Achieved the goal at a satisfactory level
- C: Achieved the goal at a generally acceptable level
- D: Achieved the goal at a minimum acceptable level
- E: Did not achieve the goal

4. Textbooks : (4-1:Required 4-2:Others)

4-1:Required

Makoto Iokibe eds., *The Diplomatic History of Postwar Japan*, (London: Routledge, 2011). *The convener will announce which chapter/section students are expected to read each week.

4-2:Others

Richard J. Samuels, *Securing Japan*, (New York: Cornell University Press, 2007).

Michael Schaller, *Altered States: The United States and Japan Since the Occupation*, (Oxford: Oxford University Press, 1987).

5. Software Used in Lectures :

6. Auditing ; Allow or Not Allow :

Not Allow

7. Note :

At the outset of in-class discussions, a designated student is required to offer kick-off questions for in-class discussions.

Back
